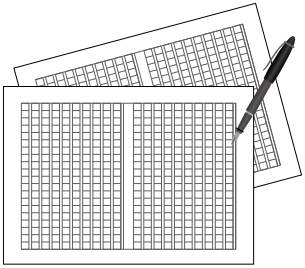
第6回 ふるさと秋田文学賞 受賞作品集

第6回ふるさと秋田文学賞　受賞作品集



刊行にあたって

本県は、全国の都道府県に先駆けて、平成22年に「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し、平成26年には、11月1日を「県民読書の日」と定めました。

「ふるさと秋田文学賞」は、その記念事業として創設され、県内外の方々に秋田への愛着を深めていただくとともに、広く読書に親しむ気運を高めることをねらいとして、秋田の自然や文化、風土、人物などを題材として描いた作品を対象に、毎年選考されている賞であります。

第6回を迎えた今年度は、全国から過去最多の１３２編の応募があったほか、作品の舞台が県内各地にわたっているといった特徴が挙げられ、改めて秋田の魅力の奥深さに気づかされました。

私は、読書は、本の作者との対話を繰り返すことによって、新たな発想を生み出す力を高めることができるものだと考えています。偶然に巡り合った一冊の本から興味や関心が広がったり、他人の人生を追体験することで人生観を深めることもできます。また、読書は、心を動かし、行動を起こすきっかけを与えてくれるため、健康寿命を延ばすことにつながるとも言われております。

今後も、県民の皆様が日々の暮らしの中で本を手にする機会が増え、じっくりと活字に触れることで、心豊かな人生を送ることができますよう、読書活動の推進に力を注いでまいります。

結びに、本文学賞にたくさんの御応募をいただき、心から感謝申し上げます。

令和2年2月1日

秋田県企画振興部長　草　彌　作　博

目　次

第6回ふるさと秋田文学賞　小説の部

◇ふるさと秋田文学賞
BASEBALL　CLOUD　上　月　文　青・・・・・7
受賞者のことば

◇ふるさと秋田文学賞佳作
颯爽と雪解け道　片　桐　健　文・・・・・51
受賞者のことば

第6回ふるさと秋田文学賞　随筆・紀行文の部

◇ふるさと秋田文学賞

遊びにおいでよ　えばた　えり・・・・・93

受賞者のことば

◇ふるさと秋田文学賞佳作

三度目の成人式　那須　厚・・・・・115

受賞者のことば

◇選評
一番書きたいことを芯に　内館牧子・・・・136
構成力と整理がいい作品を　塩野米松・・・・140
高レベルの受賞作品と問題点　西木正明・・・・144
◇寄稿
語彙を豊富に　柴山芳隆・・・・148
◇秋田県の読書活動推進施策・・・・153
◇作品募集要項・応募者内訳・・・・157

第6回ふるさと秋田文学賞　小説の部

ふるさと秋田文学賞

BASEBALL CLOUD

上月文青・作

BASEBALL CLOUD

それは本当にふいの再会で、見るまではその存在を忘れていたし、また見てみれば、そうだった、折に触れて意識のあちこちでこれを思い出しては行方を気にかけ、また日々の流れの中で忘れ、埋没し、そうこうしているうちに今日まで来てしまったのだと、表紙に触れ、その文字やデザインをしみじみと眺め、次に奥付の発行年を見て、わわわ、と口を開けてしまった。開いた口はしばし閉じることを忘れ、そのまま裏表紙の本の値段を見て、開いた口から、ほうーっと息が漏れた。定価一〇〇〇円。何というシンプルな数字の並び。この本が発行された三十年以上前の昭和六十一年、一九八六年は、消費税などというものはまだこの世の中に存在しなかったのだ。税抜きだとか税込みだとか、そんな括弧の但し書きのない、定価一〇〇〇円、は清々しく潔く目に映り、確かに流れた時間を差し出し、聡の胸に迫るものをもたらした。それにしても、この本の表紙の何と素朴で見事なことか。シックな青と深緑を背景に、上部に堂々と、タイトルと作者名。このデザインは、この四角い構えからすると、球場のスコアボードだろう。

〈野球雲の見える日〉

この文字自体が雲のように湧き上がっている。何だかあたりに風が渡っていく。タイトルに惹かれて自分はこの本を買ったのだが、当時は装丁の面白さなどに気づかなかったに違いな

い。シャレている。作者は、山際淳司。装丁は、平野甲賀。山際淳司はすでにこの世の人ではない。平野甲賀は確か、グラフィックの人ではなかったか。ふーっと息を吐く。どういうわけかA4の書類封筒にさらっと投げ込まれるように入っていた、この本。聡の周囲には段ボール箱が五つあり、その一つに本を載せてしみじみと眺めている。ウィルキンソンの炭酸を飲む。三日間降り続いていた雨が上がった今日土曜日は、一週間後に迫った引っ越しの荷物整理に絶好の日だった。

2DKのマンションの一室。単行本も文庫本も適当に投げ込み、乱読そのままに本が並ぶ組み立て式の本棚をバラしにかかったのだが、中段まできて、ラックと壁の間にズルっと滑り込むように斜めに存在していた書類袋を見つけた時は、まさかそこにあの本が入っているなど夢にも思わなかった。そんな封筒がなぜここに？　どんな事情でここに？　所々よれた封筒の重さに思わず手にとって中身を見た時は、数秒間、息を詰めた。目が合った時、〈やっと見つけてくれたか。〉〈とうとう見つかってしまったみたいだな。〉本はそんなことを呟きながら聡をやんわりと見据えていた。

そうして、こうして昔々の単行本や文庫本のかび臭い匂いの中にあぐらをかいて座り込み、ボトルから炭酸を体内に入れながら午後の時間を過ごすはめになっている。今、なぜ、〈野球

雲の見える日〉に再会なのだ？　偶然か、必然か、単に意味のない巡り合わせか。いいや、やっぱり物事において意味のないことなどないのだろうと思えば、これは昨日配達された故郷からの郵便物と、今日こうして見つけてしまった本との間には、必ず、何となく目に見えない結びの糸があるとしか思えない。そう思うことにする。

二メートル先にあるデスクのパソコン。その横にある封筒を見遣る。それは昨日届いた故郷からの便りだった。黄色い定型封筒大には『還暦同期会』と印刷されており、中身は昭和四十九年度卒業生還暦同期会開催のお知らせだった。責任幹事は斎藤充という生徒会長をしたヤツ。前回はほぼ二十年前、『四十二歳を祝う会』の知らせも斎藤からだった。相変わらず大人になっても生徒会長みたいなことをしていた。「床屋を継いでおり、横浜での理美容機器の展示会には一年に一度行くのでぜひ会いましょう」とメッセージが添えてあり、その三カ月後くらいに本当に連絡が来て横浜駅前で再会した。中学の頃、すっとした少年だった斎藤は平均的な四十過ぎのおっさんになっていた。きっと自分もそんなもんなんだろうと現実を認識した。そうか、あれからまた二十年近くも経ったか。

『清々しい初夏を迎え、木々の緑も日増しに深くなってまいりました。皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。さて、私たちが五城目第一中学校の門を出てから

四十五年の歳月が経ち、元号も昭和、平成、令和と移り行き、新たな時代に還暦を迎えることとなりました――。』

同期会はお盆前の八月十日、十一日。場所は田沢湖の温泉宿だ。聡は秋田県南秋田郡五城目町の生まれで、田沢湖には子どもの頃に両親と三人で一度出かけた記憶があるが、もはや遠い。温泉にはとんと興味がなく、周辺の温泉についてもその宿についても知らなかった。ネットでさっと調べると、隠れ宿として人気と書いてあった。

次にクラスごとの幹事の名前を見て、三組に野口康晴という名前を見つけ、聡の記憶が反応し、胸がちくりと痛んだ。野口。野口。昨日はそれ以上何かを考えたり感じたりすることをやめて、案内をしまい込んで郵便物をデスクに置いた。かつての感情が沸き上がるのを遮った。会いたいヤツでもないし、でも会ってみたいヤツでもあり。同期会の幹事ということは、野口は地元で仕事をしているのか。どんな六十男になっているのだろうか。長身でがっしりとした体つき、特に尻が大きく、豪快に振りかぶってボールを投げていた高校時代の野口に見惚れたものだ。同じ中学校出身で、野球部の仲間で、同じ高校に進んだ。野球部に一緒に入り、エースで四番となった彼を聡は誇りに思っていた。彼はまだ野球を好きでいるだろうか。聡はウィルキンソンを飲み干す。喉の奥が炭酸の強烈なシュワシュワでカッと燃え、立て続けにゲップ

が出た。

荷物整理はちっとも進まない。野口に、〈野球雲の見える日〉だ。聡の記憶は否が応でも、そこに行く。記憶は心の奥にしまい込まれているものではない。すぐそこに置いたままになっている。記憶は記憶としてどこにも行きはしないのだ。だから厄介で愛しい。くるくると、するすると、聡は高校二年生、十七歳の坊主頭の、汗と泥汚れにまみれたユニフォームを勲章にして大声を上げ白いボールを追っていたあの時間の軌道にひょいと乗る。思い出したくもないと思っていたのだけれど、なぜかうまく唆された感じで、それっ、と自分に振り返ってしまった。

野球雲を見上げていたあの頃に。

こんなはずじゃなかったのだ。あーあーというため息満杯の地を這うような声と、うっそーという悲鳴にも似た非難の声が幾重にも折り重なって聡の全身に降っている。ざんざんと。わんわんと。自分でも震えているのがわかる。初めて体感する現象だ。どんなに冬が寒くてもこんな震え方はしない。恥ずかしさと情けなさと申し訳なさと。顔はどうなっているのだろう。自分は泣いているのか笑っているのか。まさか笑ってはいまい。いや、何か、口角のあたりが

引きつって、でも目は、ごめんごめん、という感じで自分を取り繕って、全体的には反省なく奇妙に笑っているように見えないか。地面に弾んで転がった白くて丸いものを追いかけて、手にする。なんで？

止まって、一瞬凍った時間が、世界が、また動き出した。途端に悲痛な現実が聡を取り巻いた。キャッチャーフライを、誰が見ても捕球するのに難しくはないボールを、聡はぽろりと落球してしまったのだ。それも、その一球はゲームの終了と高校野球部創設以来の夏の甲子園大会県予選三回戦突破という誰もが予想し得なかった快挙を成し遂げるはずの一球で、野球部も高校の関係者も野球場の観客も、その瞬間を待っていた。誰かはすでに拍手をしていたし、誰かは歓喜の雄叫びを上げる直前の顔の形を作っていたし、誰かはフライングでガッツポーズをしてしまっていた。しかし、聡はバッターが打ち損ねた頼りないボール、ふらふらと舞い上がったフライを捕れなかった。勝利のボールを落球したのだ。なんというザマ。なんという、罪。

結局、その試合は負けた。スリーアウト、ゲームセット、バンザイで終わるはずの試合は延長戦となり、4対3、聡たちの高校はサヨナラ負けでその夏を終えた。

なぜだったのか、と聡は何度考えたかしれやしない。ボールは確かに構えたキャッチャーミ

ットに吸い込まれるラインというか、キャッチャーミット以外のどこにも行きようがないほどの距離と角度にあったし、どうするとボールを逃すのかわからなかった。不思議だった。毎日毎日考え続け、そうしてわかったことが一つ、あった。それ以外はないだろうと結論付けた。

自分は見たのだ。キャッチャーミットを構えながら、ほんの一瞬、ボールだけを見つめていたはずの目の端に、それを。レフトスタンド側の山並の向こうにかかる雲を。それはむくむくと盛り上がった雲で、ボール捕球に全神経を集中させていたはずの目が、すっと逸れた。不意の風に流れるように。ボールの背後斜めに見えた、雲。それが自分を狂わせた。それしか思いつかない。

しかしそんなことは誰にも言えず、バッテリーを組んだ野口にも言えず、聡はあの夏のあの試合から、徐々に野球から離れていった。ピッチャー野口には合わせる顔がなかった。本当は高校三年の春季大会まで続けるもりだった野球を、聡はあの高二の夏を終えて次の目標となる秋季大会でやめた。大会は予選で早々と敗退した。野口はもう少しやりたいと言ってピッチャーを続けた。しかし肩を壊してエースの座を後輩に譲った。これでうちの高校の野球部も終わりだな。あの夏の輝きは奇跡だったな。応援団長が言った。いや、お前を責めているわけじゃないぞ。そんな言い訳がひどく堪えた。

――野口とお前がいなければうちの高校の野球部なんて一回戦敗退、それも五回コールドみたいなもんだろ。夢を見せてくれたんだ。ありがとな。あれは奇跡、夢のかけらだった。いいもん見せてもらったさ。

団長の悔しさが伝わってきてまた、さらに辛くなった。確かに、名もない、普通の高校の野球部で、三回戦まで試合ができたことは奇跡で、快挙だった。ほんの少し、夢を見た。でも、夢は夢だった。夢を壊したのは、自分だ。応援団長。北川俊哉。あいつはどうしているだろう。中学、高校と同じ仲間の一人。野口、北川、そして聡。同じように野球にかかわった三人。北川の実家は秋田市内の酒屋だったな。継いでいるのか。それとも酒屋はコンビニとか駐車場に姿を変えているだろうか。

あの頃から自分を現実に引き戻す。〈野球雲の見える日〉をパラパラとめくる。本と還暦同期会案内。見えない結びの糸を撤回する。

同期会。行くべくもない。

「え、あなた、野球をしていたの?」

グラスのビールを半分まで飲んだところで、真利子は口元についた泡を拭いながら聡を見

た。肩まであった髪を樋口可南子みたいなショートカットにした真利子は、時々初めて会うような異性、という感じでドキリとそわそわと聡の胸を騒がせる。
「ずっと野球していたの？　小学校、中学校、そして高校と、それっていわゆる野球少年だったんじゃないの」
　口調は相変わらずで、そこでうんうんと安堵する。真利子はこの前まで聡の妻で、今は飲み友達という形容が相応しい。
「まあ、ね。高校の時はそこそこ打ってたんだ」
「なんで言わなかったのよ」
「なんで、って、結婚に必要ないだろう」
「まあ、そりゃそうだけど。ああ、私が子どもの頃の話をしたくなかったから、あなたにも付き合わせてしまったのね、ごめん」
「いいや、そんなことないよ」
　聡もビールを飲む。横浜中華街の外れにある大きくもなくきれいでもない台湾料理屋でガヤガヤとした人声を聞きながら飲んでいる。ここは最初に来た二十年以上前は、客も少なく、まるで自分ちの居間のような感覚でだらだらと飲んでいたものだが、今や常にノンジャパニーズ

が圧倒的な数で押し寄せてワーワーガヤガヤドヤドヤと食して飲んでいる。それが普通だ。今夜も聡と真利子はマイノリティーだった。今夜は比較的おとなしいというか、静かに飲食しているタイ人五人の女性グループが中心で、まあうるさくないのはラッキーと言える。他には中国人の観光客が数名。こうした光景を見るたびに、この店からはもう卒業だなと思うのだが、気がつくと外で飲むと言えばこの店に足が向き、聡も真利子もいつまでも卒業できずにこうしてまた飲んでいる。

店主のワンさんは自分が中国人（おそらく）のくせに、あまりにも中国人が多く来るものだから、もう中国人はいらないよ、と一昨年あたりは嫌がる素振り全開モードだったが、今ではにこにこ顔で彼らのテーブルを回って愛想を振りまいている。聡たちのテーブルはスルーだ。その代わり、頼んでもいないのに焼きそばの量は大盛りで豆腐と海老の煮込みの海老もかなり多い。ビールも注文より多く持ってくる。ありがたい。ただ一つ、困ったことと言えば、しつこく訊いてくることだ。なんでよ、なんで二人離婚よ？　それから、いぶりがっこ、今度はいつね？　この二つについてとてもしつこい。

いぶりがっこ。その度に聡は自分がしたことを後悔する。いぶりがっこ、食べてみてよ。チーズをのせて、と二年前に秋田の実家を処分するために帰郷した際の秋田土産として手渡し

た。それも青かびやゴーダなどのチーズ詰め合わせと一緒に差し出した。聡は自分の優しさに涙が出る思いだ。それがきっかけでワンさんはいぶりがっこ大好き人間になってしまい、もっと食べたい、としつこくてかなわない。聡はワンさんはおそらくいぶりがっこは好きにはならないのでないかと踏んでいたのだが、見事に大ハズレだった。もう秋田に行くことはないんだよねぇ、だからネットで買ってよ、と言うのだが、ワンさんはお土産として欲しいとわがままを言う。そしてこの話に飽きると、今度は離婚へと急カーブで話題が変わる。

離婚のナゼについては、そこに至るまでわんさか理由がありそうで、でも離婚の中身など人に説明するまでもなく、口を開く気が失せる。離婚したならナゼまた会うのよ。ナゼこんなに仲良くお酒飲んで、なんでそれでダメなのよ。ワンさんは本気で怒る。というか、わけがわからないよ、と肩を竦める。ワンさんの言うことはわかるけれど、人との別れというか、関係というか、付き合いというのはそう簡単に割り切れない。聡が真利子に誠実であろうとした結果、二人は結婚生活解消、夫婦関係解消、飲み友達へと再編成という結論に達して、それは一年経って、まあ正解だったのではないかと思っている。真利子も同様の思いなのだ。だからこうしている。二十五年という結婚生活。そんなに一緒にいたかという時間の重なりに信じられない思いもあるのだが、今で言う卒婚だ、つまりは。あまり時流に乗りたくはないけれど。

ワンさんが近頃の客や天気の話をひとしきり放って厨房へ戻った。離婚といぶりがっこについていろいろ言いたそうだったが、予約客の中国人観光客の入店で、厨房へ行かざるをえなくなり、嬉しさを隠しながら口を尖らせ、後で餃子を追加ね、と言った。頼んでないよという聡の声にバイバイと手を振って、ワンさんはスタスタと背を向けた。

「で、野球雲、なの？」

ワンさんを見送って、真利子が言った。〈野球雲の見える日〉という三十年以上前に買った本があの本棚の後ろから見つかってさ、という話から、昭和四十九年度中学卒業生の還暦同期会になり、聡が高校まで野球をしていた話になって、その続きが再開した。

「あ、そうそう。これだよ」

聡は紙袋から本を取り出した。真利子は本を手に取り、中身をパラパラめくり、しげしげと眺め、へえ、私、見覚えないなあと言った。これがあそこにあったんだ、と。２ＤＫの部屋は、一年前まで二人がほぼ一緒に暮らした住処だ。結婚したのが、聡が三十五歳、真利子が二十八歳の時。それから二十五年。当時新築マンションだった物件は中古も中古になり、新婚だった二人は離婚した。〈野球雲の見える日〉は聡が独身時代のアパートからマンションへの引っ越しとともにあの部屋に持ち込んだのだから、真利子も見覚えがないとすれば、三日前に

聡が見つけたあの場所で、本はずっと息を潜めていたことになる。知らない素振りですべてを見ていたというわけだ。二十五年も。

「で、あなたは高校のその大事な試合でキャッチャーファールフライを捕り損ねて、結局勝てる試合を逃し、責任を感じて野球から遠ざかった、ということね。で、なぜそんなイージーなミスをしてしまったのかというと、野球雲のせいだ、ということなのね」

真利子が話をかいつまんだ。聡はうんと頷いた。

「ずっとさ、野球雲とはどういうもんかなあと考えていたんだよな。それで、あの時、キャッチャーミットを構えてボールの落下を待っていた時、スコアボードの向こうの山のあたりにさ、むくむくと盛り上がった雲がさ——」

「あら」

聡の言葉を聞いているのかいないのか、真利子は本の扉の裏部分を読みながら声を上げた。

「野球雲って積雲なのね。夏の雲ね。ベースボールクラウドが現れると、ゲームは風雲急を告げるとされている。ふんふん。でも、どんな野球雲もその裏側は日の光を受けて銀色に輝いている。つまり、ゲームの哀しい結末の裏側にも喜びがあるという意味。へぇ、素敵ね。シャレてるわ。これ、何かの話の時に使えるわ」

まったく山際淳司らしい。シャレている。外国の野球に関する資料からそんなものを見つけてくるなんて。しかし、まったくその通りじゃないか。あの時、野球雲を見たおかげでゲームは風雲急を告げた。でも、哀しい結末の裏側の喜びとは何だ？　自分は何を得たのだ。野球から離れて、野球を忘れたようにして生きることが喜びだったか。いやいや。そんなたいそうなもんじゃない。野球がなければ生きていけない人生でもなかったし。

「ハイ、ビアーね」

ワンさんの奥さんのリンさんがグラスビールを二つ、テーブルに置いていく。追加は頼んでいない。ありがと、と言いながら、そろそろ紹興酒を飲みたいんだけどね、と聡は思う。

「でね、私、来月からニューヨークに行くの」

へ？　真利子が新しいビールを一口飲んで、そうそう、という軽い感じでそんなことを言う。

「ニューヨーク。ニューヨーク？」

「そう、アメリカよ」

「知ってる。ニューヨークって、旅行？」

「いいえ、しばらく暮らすの。大学時代の友だちがいるのよ。彼女、最初は結婚して旦那さん

の転勤で行ったんだけど、離婚して、そのまま住み着いてしまったの。旦那さんは日本に帰国して、彼女は仕事を得てね。もう十年くらいになるかな。仕事はね、ほら、日本のテレビが来ると現地のコーディネーターが必要になるでしょう。いろいろ仕事を引き受けているうちに需要が多くなって、コーディネーターの会社をつくって、社長になって。私もそのメンバーの一人として手伝いながらしばらく暮らしてみるの。私、名取りでしょう、現地の人に踊りを教える仕事もあるわよ、って言われて、それで俄然、向こうに行く気になったの。ああ、これで生きていける、私でも誰かの役に立つかもしれない、って、生きる希望というか勇気が湧いたの」

真利子がほくそ笑む。聡は焼売が喉につっかえそうになって、慌ててビールを飲む。今、脳内に放り込まれた情報があまりに唐突で、整理が追いつかない。名取り？　何だそれは。

「名取り、ってわかる？　踊りよ」

真利子がさらにほくそ笑む。

「知ってる。でもさ――」

次の言葉が見つからない。真利子は聡の全然知らない踊りの世界について説明し、自分の流派はこういう感じ、と手で振りをつけた。

「五歳の頃から習っていたのよ。母と叔母さんに教室に無理やり連れて行かれる感じで。踊るとどうしても母の思い出がくっついてくるから途中で何度もやめようとしたの。実際、結婚している時は踊る機会なんてなかったし。でもねぇ、去年の秋にニューヨークに行って、現地の人を前に舞ってみたら、これが踊れたのよ。私の中で、まだそういうものは死んでいなかったみたい。自分でもびっくり。不思議なもので身体と心にクセがついているというか。踊ることが人生のなかに組み立てられていることがわかったの。それで、まあ、一流じゃないけど、嗜みというか、そういうものは持っていると確信したわ。これからも続けていこうと決めたの」

「踊るんだ、君は」

真利子が頷いた。二人の間を数秒間の沈黙が支配した。二十五年の結婚生活。互いの知らないことがあったことに笑える。聡は野球。真利子は踊り。なぜ口にしないで済んでいたのだろう。野球は結婚に必要ないだろうと聡は言ったけれど、それはとても大切な何かだったのかもしれない。伊藤真利子という一人の女性には、聡の知らない可能性や夢や希望が満ちている。真利子はまだ若い。聡より七つも下だ。

「そうか。いいな、ニューヨーク。頑張って。幸せに」

口にすると軽くて気が抜けるけれど、他に言いようがない。

「ありがと」

二人、新しいビールで乾杯した。本当に真利子には幸せになってほしい。元奥さんとして、というより、真利子には一人の人間として幸せになる権利がある。それは自分が一番に保証する。

ワンさんの店でたらふく食べてたらふく飲んで、それでも体にはどこか隙間があって、それは真利子も同じ感覚だったようで、帰り道で山下公園を歩きながら心地好く夏の風に吹かれていると、自然に体を寄せ合い、唇を重ねる形になった。真利子は地下鉄駅方面に歩く気はないらしく、そのまま二人が暮らしたマンションまで無言で歩き、それは真利子の今夜はＯＫというサインでもあり、部屋に着くとシャワーを浴びる時間も惜しまれて二人は裸になった。暮らしの荷物はほぼ段ボールにしまわれて、がらんとした空間は生活感もなく人恋しさをかきたてた。聡は真利子を強く抱きしめ、真利子も聡にしがみついてきた。

夜遅く、微かな音が耳を掠めていった。真利子が帰って行ったのだ。ドアを開けて、ドアを閉めて、真利子の気配が自分から遠ざかっていく。夫婦でなくなって一年。それから何回セッ

クスしただろう。でも真利子は本当に、今度こそ、自分から離れていく。
三年前は、ここに三人いた。聡と真利子と、そして聡の母のヨリコ。あのごちゃごちゃが今では嘘のようだ。あんなにうんざりして、あんなにおろおろして、あんなに切なくて、でも今は、何もかもなくなって、しんとした闇が降りていて、聡のなかにあるのは侘しさだけだ。

＊　＊　＊

「いい加減にしてくれよ。おふくろ、何度言ったらわかるんだ？　ここは秋田じゃない。五城目のあの家はもうないんだよ」
母のヨリコは、あら、という顔でしばしきょとんと聡を見る。
「ガレージの二階の窓、朝開けたから閉めてきて。夕方になって風が出てきた」
「だからっ、ここは横浜なんだって。マンションなんだよ。ここの住所を言ってみろよ。あんなに懸命に覚えただろが」
思わず声を荒げる。母は何かを思い出す表情で、しかしすぐに顔を歪めて寝返りを打った。聡に背を向けた。むつけているのがありありだ。

「冷蔵庫に昆布の煮たのがあるでしょ。あれ、投げてよ」
「ないよ、そんなもん」
「あんたが投げた？　捨てた？」
「だから、そんなもんないんだって。誰が作るんだよ、それ」
「あたし、作ったでしょう、この前」
　母がこちらを振り向く。ぽっかりと見開いた青白い透明な目玉。いつから自分の母親はこんな目をするようになったのだろう。聡の下瞼の縁にじんわりと滲んでくるものがあり、それを慌てて振り払う。だから、そんなもんないんだって。
「あーあー。いでちゃ、いでちゃ、うぅっ、いでちゃ。困ったもんだ、お尻のここが、それと腰も膝も。いでちゃいでちゃ。年は取りたくないってばばちゃんも言ってたけどその通りだ」
　うっせーな。叫びたいところを何とか押し留める。うんざりする。あちこち痛いのもあれこれ困るのもこっちの方だ。自分に都合が悪くなると、おふくろは腰、尻、膝の痛みを訴えて声を上げ、唸り、年は取りたくないと文句を言って、ことりと寝る。寝ながら聞いているラジオもうるさくていい迷惑だ。いい加減にしてくれ。
　食べるか出すか以外は寝てばかりの母は、風呂に入るにも人の手が必要だし、トイレだって

狭いマンションの段差のあるトイレで用を足すのは重労働だった。かわいそうだと思う。申し訳ないと思っている。だから聡は母が夜中トイレに行き、トイレから出るたびに自分のベッドから起き出して手を貸して身体を支えて布団に戻すのだが、二時間おきに起こされるのはかなわないし、身体もきつい。どんなに教えても自分の思い込みしか受け入れない母を見ると、荒っぽい声も出るというものだ。睡眠不足もたまらない。自分だって若くない。もうすぐ六十なのだ。

「おふくろ」

顔を覗き込み、聡は母を呼んでみる。寝たふりではなく、本当に眠ったらしい。スースーという規則正しい寝息が確かに聞こえてくる。最近はあんなに好きなラジオもつけるのを忘れている。

母との二人暮らしは三ヶ月目を迎えていた。年末の慌ただしい十二月二十九日に雪の秋田、五城目町を出て、車で休み休みしながら横浜のマンションまでたどり着いた。途中、大雪や大風を心配したが、何があっても引き返すことはできなかったし、何としても母を自分のもとに連れて行かなければならないというその一心で車を走らせていた。母は助手席でシートベルトに押さえ付けられるように寝入っていた。このままそうしてじたばたしないでくれ。聡は願っ

た。運転中は常に喉が渇いた。じんじんと頭痛が去らなかった。

なんてこった。まさか自分の親が特殊詐欺に引っかかるなんて。事件の真ん中にいることになるなんて。オレオレ詐欺。テレビや新聞で知るその事柄は、他人に起こることであり、おふくろにはまさかそんなことありはしないとまったくの他人事として捉えていた。だって普通はそうだろう。報道に出るようなことは自分には降りかからないものなのだ。しかし、それはみごとに聡のもとにやって来た。そして母親が詐欺に引っかかった原因は、明らかに聡だった。それが悔やまれた。自分が許せなかった。

聡の勤める会社は食品軽包装資材の商社だ。大学を出て三十五年間、営業として働いている。定年は六十歳だが、聡はあと五年は働くつもりでいる。仕事は面白い。自分の企画、発想次第でパッケージに付加価値をつけた商品化が実現するし、店舗の売り場担当との信頼関係を構築すれば、一緒に店づくりもできる。包装だけでなく、新商品のネーミングにも関わる。六十歳になる秋に現在の営業所長を退けば、あとは大好きな現場を回れる。馴染みの食品メーカーから、企画担当として来てほしいと声をかけられているが、聡としてはまだ今の会社で仕事をしたい。

会社に盆休みはない。社員は有休を使いながら、七月から九月の間、一週間から十日間の夏期休暇を取る。社員の多くは世間一般の盆休みに合わせて休暇を取り、家族サービスで実家だの海外旅行だのと出かけて行くのだが、聡は二十代の頃からそんなことをしたことがない。混み合う新幹線に乗るのはまったくもって嫌だったし、家に帰っても母親と二人でどう過ごしたらいいのかわからなかったし、過ごしたいとも思わなかった。

高校は秋田市内の父方の叔父の家から通ったので、休みで秋田に帰るというと、実家ではなく叔父の家に行った。父親が中学入学前に病死したので、聡にとって叔父は父親代わりの人だった。叔父夫婦には子どもがなく、叔父は聡とよくキャッチボールをしてくれた。大学の学費を援助してくれたのも叔父だった。しかし叔父は長い入院生活の末に五十代で亡くなり、聡の足は叔父の家から遠のいた。結果、実家にも行かなくなった。帰省という意味を失ってしまった。

結局、叔父さんは死んでしまったし、会いたい友だちもいないし、仕事が忙しいとか、他のことでもいろいろ忙しいとかあれこれ理由を並べて、聡は母とは電話で話すだけで実家に行くことは久しくなかった。電話の会話も、あ、おれおれ。おふくろ、変わりないか、だったらいいけど。おれも元気だから。母の方も、ああ、元気だわ。いつ帰ってくるの。ああ、忙しいの

ね。それじゃあ仕方ないね。こっちは大丈夫よ。元気で仕事をして。じゃあ、ね。そうやって決まりきったやり取りで終わった。それが結婚する前まで続き、さすがに結婚後は真利子を連れて年に一度は顔を出して、それからまた二年に一度、三年に一度、と間遠になって、真利子も仕事が忙しくなって聡との結婚生活自体が実態のないものになっていくと、当然、聡はまた実家から、母親から離れた。賞与の時に金だけ送った。

母を横浜に引き取った時、聡は五十七歳だった。母も年を数えてみれば八十四歳で、あの半分倒れかかっている家で、冬は雪の中で暮らす親を思えばもっと早くに横浜で一緒に暮らすとか実家周辺で施設を探すとか、するべきことはあったはずだった。しかし、あたしはここで死ぬんだからね、家で白くなりたいんだから、という母親の口癖をそのままに、聡はコトが起こる前に何とかしないと、と思いつつも、まあ何とかなるか、とやり過ごし、結果としてとんでもないコトが起こってしまって、未遂とは言え事件のおかげであの町にも居づらくなって、思いもかけない現実を聡は抱えることになった。

だってあれは確かに聡の声だったもの。あ、おふくろ？　おれおれ、って。母は何の迷いなく言い切った。警察の人に何を聞かれても、あれは聡の声に間違いない。息子が金に困ってい

る。おふくろ頼むと電話口で泣かれたら、そりゃ親だもの、何とかするでしょ。母はそう言い張ってきかない。聡は頭を抱えてため息を吐く。

その日は大事な打ち合わせが入っていたが警察から朝八時過ぎに、おかあさんが特殊詐欺に、いえ、未遂だったんですが、被害に遭いそうになって。ええ、お金は取られずに済んだのですがつまりはそういう状況で、と電話がきて、できれば息子さんにも話を聞きたいのですが、と言われて、え、は、何だ、と、とにかく会社に連絡をして休みをもらい、バタバタ京浜東北線に乗り、秋田新幹線に乗り、ローカル線に乗り、タクシーに乗り、実家に走った。田んぼを超え、山並を眺め、緑をかき分けてたどり着いた実家は、天気も好くて春の陽光が降り注いでいるせいか、寂れてうらぶれた家の貌が丸出しで、自分はここから出て行った、そして今もここに老いた母を一人置き去りにしているという現実と罪悪感が圧倒的な力で聡を圧し潰した。自分は何をいい気になって働いてきたのだ。ちくしょうっ。

中に入ると若い女性警察官がいて、見覚えのある年寄りがいた。そして、縁側に背中を向けた年寄りが一人。おふくろ。

「おう、聡かあ。帰って来たか」

しわの中に埋没している目が笑った。背丈は聡の記憶の半分近くに縮んでいたが、田んぼ一

つ越えた先の工藤のじいさんだ。歳月がみごとに降っている。どうも、と頭を下げた。
「聡、あんた、あたしに電話してきたでしょう。お金、大変なんだって。あんた何をしたの？」
向けていた背中がくるりとこちらを向き、母は聡の顔を見るといきなりすがりついてきた。いやいや、おふくろ、違うよ。違うんだって。いやはや、まいったね。工藤のじいさんが湯飲みのお茶を啜ってだみ声を出す。
「わしんところに来てさ、お願いだから郵便局に行ってお金をおろしてきてくれと言うんだわ。定期も解約して、三百万！　ヨリちゃんは金持ちだなあ。まあ、わしの次にな。ハハ」
「はあ、いろいろご迷惑をおかけしてすみません」
「でもよ、おかしいんだな、これが。話を聞くと、おかしい。話の中身を聞いても、聡が困っている、聡の知り合いがお金を取りに来る、の一点張りでさ。そん時ちょうどラジオでオレオレ詐欺に注意とか何とか言ってっから、ああこれはそうかもしれないと、わしはぴんときた。で、警察に電話して、ほれ、お金を取りに来るという時間に張り込んでもらって」
工藤のじいさんが胸を張る。
「で、捕まったんですか」

「いいえ、あの、相手に気づかれてしまって」
女性警察官がもごもごと口を動かす。
「叫んだのさ、ヨリちゃん。さとしっ、逃げろって」
工藤のじいさんが芝居じみた大声を出す。
「はあ？」
聡は母を見た。母は目配せで、逃げろ、と言っている。
「お金の被害はないんですが、息子さんにもおかあさんがこういう状況にあることを認識していただきたいと。一人で暮らすのはだんだん難しくなっているんじゃないですか。この先もそうした被害に遭わないとも限りませんし。どうでしょう」
どうでしょう。警察官に言われて、聡は固まる。どうでしょう。どうでしょう、って。おれ、どうする？
「はあ、あの、考えます。このたびはいろいろお世話をかけて申し訳ありませんでした。ありがとうございました」
工藤のじいさんと警察官に深々と頭を下げた。

それから半年後の冬に母を横浜に連れてきた。その間、一カ月に一度は実家に帰り、毎晩電話をした。オレオレ詐欺未遂の後から母は家に引きこもるようになり、最初は工藤のじいさんをはじめとする周囲の心配を迷惑そうにはねつけていたが、そのうち面倒くさいと言わんばかりに戸に鍵をかけ、一人の世界に住んだ。佐藤のヨリコさんは、オレオレ詐欺に引っかかったらしい。気をつけないとなあ。母は気鬱になった。そうして、ちょっとボケた。

「私がいけなかったんだわ」

母にパジャマを着せて布団に入らせる。真利子が掛け布団の首元をとんとんと優しく叩くと、母はすぐに目を閉じた。真利子の魔法は今日も効き目抜群だ。

「あなたがそうするのなら、と私もヨリコさんには関心を払わずにきた。忙しさにかまけてヨリコさんを放りっぱなし。ひどい嫁だわ。自分勝手なものね。つくづく嫌になる」

「いいや。みんなおれが悪いんだ。わかっていたんだ、心のどこかでは。年取るってことを、その現実を見たくないばっかりに家の様子も見に行かず放っておいた。子どもとしての責任から逃げていたんだ。まいるよな、オレオレ詐欺だなんて。電話の声が、間違いなく息子だなんてさ」

「そんなに自分を責めないで。でも、おかあさん、かわいいわね。何だか若い頃から比べると、年取ってかわいくなった気がする」

母を引き取ってから、妻の真利子は献身的に母の面倒を看た。真利子は中学生向けの塾の英語講師として忙しい日々を送っていた。結婚して二十年以上を数えていた。夫婦でいることの意味、そして無意味さを二人で何となく感じ取っていた二人には、突然暮らしのメンバーになった母ヨリコは恰好の話のネタになり、二人の会話は弾んだ。離婚、という二文字の現実からひとまず逃げる理由を得た。

真利子は母の入浴後、必ず母の脚をマッサージしてむくみ予防をしてくれた。母はそれをとても喜び、真利子が仕事で遅くなり、マッサージは今日は休みだというと悲しい顔をして布団に入った。真利子は暇があれば母の話し相手になり、昔話に付き合った。母は今の今の話はころりと忘れるくせに、聡が生まれた頃のことや自分の結婚がどう決まったのかはるか彼方に霞んでいるような時のことを、目の前のテーブルに並べて高らかに言葉をつなげた。そんな母を見ると、年寄りはこれまで長く働いて生きてきた恩恵で、好きな時空にいつでもどこでも行ける能力を授かったのかもしれないと聡は感心するのだった。

「うちの父親は製材所で働いていたもんだけど、知り合いの酒飲みの人と家で酒飲みながら、

ヨリコの婿にあれはどうだとか言って、その場で婿を決めたの。あたしは嫌だったけどねぇ。仕方なくて、それで結婚するその日にとうちゃんと会って、それで」
「でも優しい人だったんでしょう、旦那さんは」
「うーん、まあね。子ども、すぐにできるかと思ったけどなかなかできなくて、これは婿として役目が果たせないと言ってたかしらねえ。ようやく聡が生まれて、それでまあ良かった、良かったと」
「聡さん、似てますか？　お父さんに」
「うーん。だね。優しいところは似ているね」
　母と真利子の会話を聞いているのは楽しかった。母はよく笑ったし、真利子の柔らかな表情や声を聞くのは久しぶりで心地好かった。もうずっと前から三人で暮らしているような気分にもなった。このまましばらくこんな時間が続いてほしいと願った。もしかしたら、母のおかげで二人が夫婦でいる意味をまた見出せるかもしれない。そんな希望を持った。そして想像した。自分が母のように年を取った時、真利子との出会いや結婚生活をどんなふうに思い出すのだろう。真利子はどうだろう。聡と過ごした時間を少しは幸せだったと思い返してくれるだろうか。

「私は私を捨てて行った母を憎んでいるでしょう。母が若い男に走ったことで家族はおかしくなったし、母のことなんか人生で思い出すことはないと決めていたけど。ヨリコさんといると自分ができなかった母親孝行をしているようで嬉しいの。ありがたいの。良かったわ。ありがとね。これで少し、母を思い出す自分を許していいような気がする」

真利子とは別居が始まっていたが、母が来てからは聡の部屋に泊まるようになった。和室を母の部屋にして、母を寝かせると真利子と二人、リビングでワインを飲んであれこれ話し、時に同じベッドで寝た。別れを前提にしているからこそなのだろう。抱き合う時間は互いに高揚していた。真利子の馴染んだ身体からは新鮮な香りが放たれ、聡はそれを心行くまで吸い込んだ。

老いというのは残酷だった。母が来てから一年。介護保険を申し込み、ヘルパーに来てもらいながら母の生活を支えたが、母は歩行が困難になり、トイレは何とか自力で済ませることはできたが、衰退は明らかだった。冷蔵庫にある煮物は捨ててくれ。ベランダにある洗濯干しは中に入れなくていいのか。ガレージの窓は閉めてくれたのか。母の頭の中はいつもそれらで占められていて、毎日夜の同じ時間に同じように口にした。聡も真利子も最初のうちはここは秋

田の家ではなく横浜で、といらいらと訂正にかかったが、それは虚しい作業であると疲労し、自分たちが楽になる唯一の方法は否定しないことだと悟った。母の顔を見て、わかったよ、ちゃんとやるから心配しないでと言うと母は安心した。母は旺盛な食欲と睡眠欲を示す人となり、トイレを催す自分の身体に嘆きながら、頑張る、頑張るとマンションの細い廊下を這い、四つん這いになりながらトイレに行き、便器を抱きしめ、便座に腰を下ろし、渾身の力を出して排泄した。「自力でトイレ」は母の譲れないプライドのようだった。そんなに頑張らなくていいんだと言いたかったけれど、やめた。父亡き後、小学校の給食のおばさんとして働いた母。通勤のために乗れなかった自転車乗りを懸命に練習し、その練習に懸命に付き合った十四歳の自分を思い出して泣けてきた。

老いというのは忍びなかった。聡は年寄りになった母を受け入れ難かった。自転車を乗りこなし、快活に笑って集会ではカラオケを楽しんでいた母は二度と戻らない時間の向こうへと確実に去ったのだ。そしていつか自分も、真利子も、同じようになる。それがとてつもなく恐ろしく、しかしそれは誰もが避けられない現実で、一体どうすりゃいいんだよ、と聡は酒に逃げることが多くなった。ワンさんの店で、真利子とよくため息をつき、無言でしこたま酒飲んだ。親はああして老いる姿を子どもに見せているのね。私たちにはできないことだわ。真利子

の言葉がアルコールを飛ばし、いくら飲んでも酔えなかった。

介護保険の手続きも使い方も施設探しも、すべて真利子がしてくれた。塾の仕事も忙しいのに、平日にしかできない事務的な手続きをしに役所に行ってくれて、ケアマネジャーさんと相談してくれた。そして有料老人ホームへの入所が決まった。幸運にも母に適したホームに空きがあり、それに入れるという。母のためにも稼ぐぞ、と聡はやる気を奮い立たせた。一年前の初夏だ。しかし母はホームに入ることはなかった。ノー残業デーの水曜日にワインを抱えて聡がマンションに帰ると、真利子が母の眠る布団の傍らで母の白髪を撫でていた。

「今、ちょうど今、行ったわ。あなたの足音を聞きながら。すごく自然に、穏やかに」

いつもと同じように半開きの口をしてぽかんと寝入っている母を見た。おふくろ。聡は座って手をとった。

「行った、んじゃなくて、帰ったのかもしれないわね。人はこうして、みんな帰るんだわ、きっと」

穏やかな真利子の声だった。どこに、と訊こうとしてやめた。両親や聡の父や、家があった故郷の山や田んぼ、川のどこかに母は、母の魂は飛んでいるような気がした。そして自分もいつか、そこに帰るのだ。そっか。帰ったのか。そんなことが信じられた。

おふくろ。楽になったか。ゆっくり眠ってくれ。ごめんな、いろいろ、ごめん。
それから少しして、真利子と他人になった。

＊　＊　＊

「佐藤？　聡？　さとし？」
ワンさんの店で飲んでいると、テーブルに置いている黒いスマホがブルっと震えた。見覚えのない番号表示だったが、営業職としてはどんな時も常時対応が常で、スマホを持って店の隅に行き、もしもし、と出ると、佐藤？　聡？　という声が二度、聞こえてきた。
「はい、佐藤聡ですが」
「おー、おれ。野口」
ん？　のぐち。のぐち！
「のぐち、って、のぐち、やすはる？」
「そうだよ。やすはる。ひっさしぶりだなぁ。元気か？」
「あ、おお、おお、元気で生きてる。そっちは？　秋田にいるのか？」

「そうだよ。大学は千葉でさ、就職も船橋だったんだけど、親父が脳梗塞起こしてさ、四十半ばで秋田に戻ったのさ。兄貴が親父の会社を継いでいたんだけど、兄貴も具合が悪くなって、結局今じゃおれが社長をやってるのさ。しがない印刷会社だけどな」

「へぇ、社長か。すごいな」

「ハハ。で、来るのか、還暦同期会」

「あ、いや……」

「来るんだな。楽しみだなあ。高校以来、会ってないもんな。先週、駅前で斎藤充と北川俊哉と打ち合わせで盛り上がったぞ。駅裏の何だっけ、なまはげが出てくる居酒屋で酒飲んでさ。俊哉もさ、聡と野球の話をしたい、チョーしたい、って言ってたぞ」

野球。背後でワンさんの笑い声やノンジャパニーズの観光客たちがいきなりノリノリで騒ぎ出したので、聡は店の外の横の路地へと逃げ込んだ。そうだ。還暦同期会出欠の返事を出していないのだ。自分は忘れたふりをして、ちょっと逃げている。

「あのさ、野口」

「何だ、佐藤」

店の喧騒は遠くなったが、視界に人工灯の明るすぎるほどの光が映り込んできて、ああ、今

夜は横浜スタジアムでナイターなんだと口角が上がった。見たいな。相手はジャイアンツかタイガースだったか。聡は息を整える。

「あのさ、野口、おれさ」

「ん？」

「野口に謝ってなかったよな」

「あ？」

蒸し暑い夜に、ふっと涼しい風が渡る。真利子。今頃、ニューヨークの空の下で踊りを舞っているか。真利子は昨日、日本を発った。聡には突然で、真利子には予定通りに。自分は真利子にちゃんと感謝を告げただろうか。一瞬の後悔が胸を突く。ありがとう、を幾度重ねても足りないほどのものを自分は真利子にもらった。

おふくろ。真利子は行っちゃったんだよ。聡はまだ新しい部屋に慣れない。

「野口さ」

「何だよ」

「あの高二の夏の地区予選、甲子園めざしていたあの大会で、おれがキャッチャーファールフライを落とさなければ、まだ夢の続きを見ていられたのに、ごめん」

「――」

野口の沈黙に聡は覚悟した。やっぱりわだかまりはある。あって当然なのだ。あの一球で、多くの人間の夢が絶たれた。

「あー、あー、あー」

「うん」

「そんなこともあったか」

あ？

「高二の時だったか、それ。まあ、言われてみればそんなこともあったような。でもおれにはもっとショックな負け方があれこれあってさ。いちいち覚えてないんだよな」

へ？

「ピッチャーはさ、すべて自己責任。おれの野球哲学。勝ちも負けも、良いことも悪いことも全部。誰かのエラーのせいで自分は負けた、勝てる試合を落としたなんて言えるかよ。かっこ悪い。え、で、まさか、聡はそれを今の今も気にしているのか。冗談だろ」

「いや、あの、何だか野口の声を聞いたら思い出してさ」

「ハハ。でさ、おれたち、北川たちとシックスティーズという野球チームを作ることにして

さ。ぜひとも聡にもメンバーになってほしいんだよ。六十なんてまだまだジジイの入り口だろ。いや、ジジイでもないな。ジジイなんて呼ばれてたまるかよ。それにおれたちの周りにはホントのジジイがいっぱいいてさ。つかえてんだ。まったく半端な年だ。年に一度でもこっちに帰って来てさ、野球、やろうぜ。ほれ、去年の金足農の活躍を見たら、やっぱり我が故郷は野球王国だぜ。誇れるよなあ」

鼻の奥がつんとした。忘れるくらい昔に別れたのに、野球という言葉だけですぐに気持ちは同じ場所に帰ることができる。還暦同期会。行くべくもないと思っていたが、行くか。帰るか。放り投げたはずの結びの糸を手繰り寄せる。まあ、おふくろの墓のこともあるしな。ワンさんにいぶりがっこもあげたいし。帰郷の理由はある。

「野口におれ、訊きたいことがあるんだ」

「ハハ、今度は何だよ」

うん、あのさ。と聡は深呼吸した。野球雲を。

「ベースボールクラウドを、野球雲をさ――」

〈了〉

本を読んで、人に会って、書く

上月文青

自分はなぜ小説を書きたいのか、小説を書くとはどういうことかと考えることがあります。いつだったか母親から「頼まれてもいないのによく書けるわね」と、褒められているのか呆れられているのか、そんなことを言われたことがありました。確かにその通りです。小説を読んで「面白かった」と思う、それだけでいいのではないかと。でも、本を読むと、私はどうしても自分でも書いてみたくなります。人の話を聞いて感じるものがあると、その世界を自分なりに表現したくなります。物語を書くというのは地道な作業ですが、嘘に根も葉もつける面白い作業でもあり、高校生の頃から創作することに夢中になりました。社会人になってからも、仕事をしながら深夜まで原稿に向か

表彰式での上月さん

うこともしばしばでした。

そうして、書いたら、今度は誰かに読んでもらいたい、何か言ってほしいという気持ちが湧き上がります。私は小説を書くと、友人たちに送って読んでもらっていました。拙い小説を懲りずに読んでくれた友人たちには本当に感謝しています。そんな時間を経て、私は五十歳を過ぎてから、ある文学賞を受賞しましたが、そのニュースを聞いて最初に友人たちが口にしたのは、「まだ書いていたんだ！　偉い！」でした。

五年前、東日本大震災を経験した知人の話をもとに小説を書きました。「悲しいこと、辛いことでも物語として読むと、ただ悲しいだけではない、何か希望が見える」とその知人や読んでくれた人たちに言われ、小説の仕事というか役割をその時改めて教えられた気がしました。

私は山形県庄内町（旧余目町）出身で、現在は宮城県仙台市在住です。秋田市内には友人が住んでおり、一泊で秋田を訪ねることもあります。今回、「ふるさと秋田文学賞」を受賞したことで、秋田とはさらに親しい間柄になったと感じています。とても嬉しく、光栄なことです。

これからも本を読んで、人に会って、小説というものを書いていきたいです。

ありがとうございました。

第6回ふるさと秋田文学賞　小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

颯爽と雪解け道

片桐健文・作

颯爽と雪解け道

夜になり気温はジワジワと低下してきた。しかし冬本番の勢いはどこへやら。むしろその冷たさが火照った頬に心地良い。そんなことを考えながら、私は飲み会の帰り道を楽しんでいた。勢いそのままにおしゃべりを続ける仲間たちからひとり遅れ、過ぎ行く季節を惜しみ、春の気配に心躍らせ、通いなれた道を歩いていた。

道路わきにはまだ白いものがチラホラ。きっとそこにはフキノトウが芽を出しているに違いない、天ぷらとかおいしそうだな、などと思っていたら盛大にコケた。

私の悲鳴に誰もが振り返った。一瞬の沈黙。そして大爆笑。「大丈夫？」と心配してくれた友達と、「どんくさー」と苦笑いの奴とが半々。しかし私の身を案じてくれた優しい子の表情にも、ちょっとヤダ、やめてよね恥ずかしい、なんて気持ちが見え隠れしていた。でもまあ、痛さと恥ずかしさを笑顔でごまかしながら、私は彼女たちに同意した。確かにそうだ。自分でもつくづくそう思った。大学生にもなってあんなに派手に転ぶなんて。穴があったら入りたい。まさにそんな心境だった。

でも問題はその〝穴〟だった。雪道での転倒に怯え、どこか警戒しながら腰を落とし気味に歩く季節を乗り越え、私は完全に油断していた。確かに積雪には注意しなくて良くなる。しかし毎年この時期の路面状態はとても悪く、久し振りに顔を出した道路にはちょっと信じられな

いほど大きな穴が開いていたりする。私の足元に転がるこぶし大の石も、おそらくそんな穴から飛び出してきたのだろう。

アスファルトのひびが入った部分は黒く濡れ、不規則な亀の甲羅模様を作り出す。私は暗闇の中に潜むその姿をはっきりと想像することができた。成長した亀裂の中央にぽっかりと出現した大きな穴は、幼いころから見慣れた春の風物詩だ。大抵の場合手慣れた役所の業務処理により素早く修復されるが、場所によっては発見が遅れしばらく放置される。それは誰にも見向きされない痛々しい亀の死骸のように、白日のもと野ざらしとなる。

路面の劣化は雪解けと凍結が繰り返されることにより発生する。昼間のうちにちょっとした凹凸に入り込んだ雪解け水が、夜間凍結してひび割れを作る。その弱くなった部分、固い表面の一部に出来上がった歪みに対し、執拗な反復攻撃が繰り返され、アスファルトは粉々に砕けてしまう。知識としては知っているが、本当に水にそんな力があるの？　と首をかしげたくなる。しかしそれは全てを覆う雪の下で誰にも見られず、ひっそりと着実に進行する。

「お父さんたち離婚しようと思うんだ」

血のにじんだ膝小僧を消毒し、我ながら大げさな特大絆創膏を貼ってひと息ついた後、私は

家の中の雰囲気がいつもと違うことに気が付いた。だから「どうかしたの？」という私の曖昧な問いに対して、父がハの字眉毛の複雑な表情で話し始めた時、驚くより先になるほどと納得した。

母は怒ったように、姉はすねたように、父は困ったように、情けなく薄汚れた私を出迎えた。最近ＬＥＤに交換したばかりの玄関照明が痛々しい姿を無慈悲に照らし、思ったよりも被害が大きいと知った私は大騒ぎした。でもそれは騒々しい私の帰宅時によくある、別段珍しくもない我が家の光景。あれ、お父さんいつもより帰り早くない？　くらいのちょっとした違和感を私に与えた程度だった。でも家族の態度は長く尾を引いていて、そこで鈍感な私も流石に何かあったと感付いた。

「聞いてるか、文香？　お父さんたち離婚しようと思うんだ」

「お父さんたち？　違うでしょ。お父さんが勝手に言い出してるだけ。私は納得してない！」

「そうなんだ。お父さんが勝手に言い出したんだ。文香には本当に申し訳ないと思う。でもお父さんは決めたんだ」

「決めた？　勝手に決めないでよ。二人で決めることでしょ。ちゃんとした説明がないと私は納得しません」

どうやら一連の会話は私が帰宅する前すでにおこなわれていたらしかった。姉が参戦しないのは父の決意が固いことを理解したからではないか。ここ数年の姉はだいぶ丸くなったが、以前なら母と同じ態度、あるいはもっと辛辣に父を責め立てただろう。母のヒステリックなわめき声をＢＧＭにして、私はどこか他人事のように状況を推測し、成り行きを見守った。

そして私は知っていた。母が求めた『ちゃんとした説明』の論拠は、父の本棚に置かれた大学ノートの山に潜んでいるに違いなかった。父が学生の頃からつけていた日記。そこに母や姉への恨みつらみが溢れているとは言わないが、それでも日々のことを書いていたら彼女たちの仕打ちに触れないわけにはいかないだろう。一つ一つは大したことではなくても、長く続けば精神的に辛い、水分をたっぷり含んだ冷たい雪に重くのしかかられたような陰湿な毎日、父が耐えてきた時間に。

我が家は父、母、姉、私の四人家族。男性は父一人でちょっと肩身が狭い女性上位一家だが、ごくごく普通に仲良くやって来た。両親共働きで、父は家庭に仕事を持ち込まない主義、反対に母は持ち帰りも辞さない仕事大好き人間。そんな調子だったので幼いころの姉はパパ大好き、私はというとどこか冷めた子だった。

姉が父に対する態度を一変させたのは小学校の高学年。それまで甘えていた父を毛嫌いし「臭い」、「うざい」、と公言するようになるまでそれほど時間はかからなかった。洗濯物を別々に洗うように要求し、必ず父より先にお風呂に入る。そんなステレオタイプな父親嫌いが、真面目でどこかズレている姉らしいとも言えた。

姉が父を疎んじるようになったのに、大した理由はなかった。当時同じ登校班に姉より一つ学年が上の子がいて、その子が父親大嫌いを公言していた。姉が「父を好きだ」と何気なく言った時、彼女はその言葉を聞き逃さなかった。「信じられない」とか、「キモイ」とか、姉を罵る声は登校班の列の前の方にいた私にも聞こえた。そんなことがちょくちょくあって、姉の急激な変化が始まった。

当初気落ちした父は、それでも姉の成長を喜ぶという良く出来た父親役を自らに課した。反抗期も成長の証拠、という前向きな考えだった。もちろんあからさまな姉の言葉はちゃんと叱ったが、基本的に父は争いを好まない大人しい人だ。鷹揚に事態の進む方向を見つめ、ソフトランディングを願っていたように思う。

そこまでならよくある話であり、父と思春期の娘の間にありがちなトラブル。問題をこじらせたのは母だった。ある日ちょっとしたことで父に注意された母は虫の居所が悪かった。しか

し父の言うことは正論であり言い返せなかった。そこで母は姉に乗っかる形で仕返しをするという、何とも子供っぽい作戦を実行した。

悪いことにこれが効果抜群。母は姉をバリアとして、安全圏から父を攻撃する手段を手に入れてしまった。姉の方も思いがけない味方の出現に喜んだ。何しろそれまでは子供の反抗期という扱いだったのが、大人である母からのお墨付きをもらった形になった。父親への非難は〝思春期特有のはしか〟から、〝正当な大人の主張〟へと進化を認められた。

かくして母と姉は持ちつ持たれつ、共依存の関係になっていった。姉は相変わらず父を無視し、大げさな溜息で反発を表した。そんな姉の態度はまったく妥当なものだ、悪いのはあなただ、と母は暗に、時にはっきりと父に宣言した。こんなことを何年も繰り返されれば誰だって気が滅入り暗示にかかる。悪いのは自分だ、と。

私が中学生、姉が高校生の頃、父が単身赴任になった。これを機に我が家に変化が起きるのではないか、と当時の私は考えた。引っ越し手伝いのお礼として連れて行ってもらった、お高めレストランで「お母さんもお姉ちゃんも不安がるんじゃない？　これで二人ともお父さんのありがたみがわかって優しくなるかも」なんてことを私は言った。そんな生意気中学生の言葉に対し、「どうかなぁ」と苦笑いで答えた父の顔は、寂しそうな中にも少しの期待があったよ

うに思えた。
二年後、同じレストランの隣のテーブルで「結局何も変わらなかったね」という私の発言に対し、これまた苦笑いの父。その表情は任期が終わりただただ安心しているようにも見えた。寂しかったのは父の方だけだったのか。そう考えると私は少し残念に思えた。
始まりが急なら終わりも急。姉の変化は再び突然やって来た。大学に入ってしばらくすると姉は突然父に優しくなった。二人の間に日常会話が戻り、時には姉の方から話しかけ、笑顔を浮かべることも出てきた。素直に喜ぶ父、当惑する母、付き合いきれない私。この十年は何だったのか。父も少しは怒るべきだ。私はそう思った。
未だに母の方から父に話しかけることはない。父は努力を続けているが、母の反応は素っ気なく何ともビジネスライクだ。それでもまあ、家族仲は以前よりずっと良くなり、姉の父親嫌いは昔々の笑い話となった。しかし、姉の変化から三年経ち、突然の父の離婚宣言。平凡だと思っていた私の毎日も中々波乱万丈だ。
驚いたことに父には再婚したい相手がいた。どちらかというと父の離婚宣言に好意的だった私でも、流石にそれはどうか、と一瞬身構えた。だってそれってつまり浮気でしょ、お父さん

私たちを裏切ってたの？　そんな気持ちが沸き起こった。しかし話を聞いてみるとどうもそういうことではなく、二人は男女の関係にはない、再婚したいというのも自分一人の勝手な考えだ、というのが父の弁明だった。

「そんなの嘘よ。嘘に決まってる。だってそうでしょ。いい年した大人が再婚まで考えてて、信じられない。お父さんその女と協力して私たちを騙そうとしてるでしょ。私は絶対認めませんから」

昔ならここで姉の援護が入った。言葉少なく、しかし効果的な合いの手により、母の糾弾はよりヒステリックに、いつしか人格攻撃的な色合いを帯び始め、完全に父を叩きのめす。それが昔ながらのパターンだった。ところが姉は乗ってこなかった。

「そう思うでしょ、綾香。あんたも何か言ってやってよ」

母の問いに対する姉の答えは小さなうめき声として表現された。それは昔の姉の突き放したようなノーコメントとは違って、もう少し複雑な色合いが感じられた。

「私やらなきゃいけない課題があるから……」

そう言い残して姉は逃げるように居間を後にした。力なく音を立てて閉まったドアを見詰める母の目には当惑が濃く表れていた。頼りになる援軍が来ないことに対する不安。母の視線は

新たな味方を求めてさまよい、一瞬私の眉間の辺りに留まった。しかし文香では頼りにならない、この子は駄目だ、母の表情がそう言ったのを私は見逃さなかった。火に油を注ぐことになるので自分は黙っていよう、そう思っていたが母の反応があんまりだったので、この際言いたいことを言ってしまうことにした。

「お父さんだったら有り得るんじゃない？　浮気とか関係なしに再婚を意識とか。なんか浮世離れしてる、っていうの？　それって法律的に考えたら浮気にあたるのかもしれないけど、そもそもお父さんとお母さんの夫婦仲って破綻してたよね」

私だって母の意見はもっともだと思った。中学生じゃあるまいし結婚を意識する大人同士が何もない、父の言葉を借りるなら〝清い仲〟なんてことがあるだろうか。それが私の素直な感想。しかし――、父なら有り得るのではないか、そう思うのもまた事実だった。

「お母さんだってよく言ってたじゃん。芸能人とか、近所の格好良さげなオジサンとか、こういう人と再婚したい、って。昔の同級生に熱を上げたこともなかったっけ？」

母が何か言いかけたのを遮り、私は取って置きのカードを切った。父が単身赴任中の出来事だ。浮気を疑っているわけではないが、当時の母が同窓会で久し振りに会った元恋人に夢中だったのは事実。母は再会を〝運命〟と呼んだ。どこかで間違えてしまった人生をやり直す、と

息まいては、姉に応援され、二人で盛り上がっていた。しかしある日おめかしした母が姉の激励で送り出され、しかし肩を落として帰宅した時、私は成り行きを理解した。
「それとこれとは話は別でしょ。いくつになってもトキメキを失わないのって大事だと思わないの？」
「あ、それは良いことだね、トキメキ。そう思うからお父さんのことも納得だわ」
「違うでしょ！　お父さんのは浮気なの！」
私には母のダブルスタンダードを理解できないし、このまま続けても平行線にしかならないことは明白だった。あんまり意地悪するのも悪いな、と考えるだけの余裕が私にはあった。
「でもポイントってそこじゃないよね。浮気かどうか、だなんて慰謝料の金額に差が出るくらいじゃない？　問題はお父さんが離婚する気だってことだと思う。で、お母さんは？　離婚に応じるの？」
「いいわよ！　離婚でも何でもしてやるわよ」
なんだ、じゃあ話が早い。私がまとめに入ろうとした時、母は慌てて話を続けた。
「でもこんなのは駄目。認めない。一方的に、突然騙し討ちみたいに切り出すなんて許せない。離婚には応じない」

一体どっちなんだ。自分の母親ながら面倒くさい人だと思わずにはいられなかった。私はドライだと言われることが多かったが、この歳になってある意味しょうがないと考えていた。母親と姉が複雑な思考の持ち主なのだ。自分くらいは淡白でないと話が進まない。

「それは僕も悪いと思っている。だからすぐに離婚してくれとは言わない。時間がかかってもいい。でもこのままじゃ僕は何で生きているのかわからないんだ。綾香も文香も大きくなって手がかからない。君には嫌われている。だったら結婚し続けている意味があるのか。山本さんと話しているうちに、そう思うようになったんだ」

「山本？　単身赴任先で部下だった彼女？　信じられない。人妻じゃない」

「違うんだ。確かに君が遊びに来てて偶然会った時は旦那さんが一緒だった。でも山本さんはその後離婚している」

「どうだか。お父さんが原因の離婚なんじゃない？」

父の表情が険しくなった。母はたまに人の神経を逆なでするようなことを言う傾向があった。そしてそれは大抵の場合非常に効果的だったが、それで事態が建設的な方向に進むわけではなかった。

「山本さんはそんな人じゃない。もちろん僕もだ。彼女は旦那のＤＶに苦しんでいて、それが

お子さんにまで及ぶのを恐れて離婚した。その時何度か相談に乗って、それで僕も自分自身の結婚について考えるようになった」

「何度か相談、ね。その時何かあったんじゃない？　いい雰囲気になったりしたんじゃないの？　何もないだなんておかしいわよ」

「お母さん！　おかしいのはお母さんの方だよ」

しかし、私の弁護にもかかわらず父の動きが止まった。それまで毅然と振る舞い、母とは対照的に冷静を貫いてきた表情に明らかな動揺が浮かんだ。

「一度だけ。一度だけ抱き止めた。山本さんが階段でよろめいて転びそうになった時、下にいた僕が抱き止めた」

「ほらね！　やっぱりそうじゃない。お父さんは私たちを騙そうとした。この分だと嘘は一つだけじゃないでしょ。ふざけないで！　いい加減にしてよ！」

「何がダメなの？　転びそうになったその人をお父さんが助けてあげたんでしょ。いいことじゃん。私だって転びそうになって助けられたら感謝だし、友達が転びそうになったら助けてあげたいよ」

「だから違うの。お父さんはよその女の人を抱き締めて、しかもそれを私達に隠してたの。や

ましいことしたの！」

ここまでヒートアップしてしまうと取り付く島がなかった。自分が正しくて、他の意見には一理もない。母はそこからスタートするので他人の言うことは理解しようともせず、議論にならないのが常だった。

父は言わなくても良いような些細な弱点を見せてしまった。わずかでもほころびがあるなら気になってしょうがない、隠し立てできない馬鹿正直なタイプ。逆に母はその小さな傷を決して見逃さない。自分のことは棚に上げて執拗に攻め続けるタイプ。私から言わせれば、その点で二人の相性は最悪だった。通常なら問題とならないが、何かのキッカケで簡単に悪循環が始まってしまう組み合わせ。父の離婚宣言は全くもって妥当な提案に思えた。

いつものパターンに陥ってしまった両親を見ながら、私は役に立たない助け舟を出すタイミングを見計らった。昔から父は「いいんだ文香、お父さんが悪いんだから」、そう言って私の助け舟に乗ろうとしなかった。だから私はいつしか夫婦げんかに対して積極的な加勢を試みなくなっていったのだ。しかし今日の父には変化を期待させるものがあった。

「ともかく僕は離婚したい。もし浮気を疑うなら調べてもらっても結構」

その断定口調はいつもの父ではなかった。高らかな宣言はエンジンのかかってきた母の動き

を完全に止めてしまった。未体験の状況に対して言葉が出てこない、そんな風に見えた。
「つまりお父さんは離婚したい。お母さんは離婚したくない。そうでしょ？　だったら浮気かどうかじゃなくて、今後どうするのか話し合うべきだよ」
「文香！　あんた親に向かって何てこと言うの！」
「ありがとう文香。お父さんもそうしたい。お父さんやお母さんに過去どんな落ち度があったかなんて、そんな事どうでも良いんだ。水掛け論にしかならない。僕はこの後どうするかを話し合いたい。そして話し合いがどうなろうと離婚する」
前半は私に、後半は母に向って父は自分の意思を表明した。それは私の知っている父の姿ではなく、しかし一方でどこか見覚えがある姿だった。
私は何度か真剣に疑問を感じ、父に質問したことがあった。「何故母と一緒にいるのか、幸せなのか」と。それに対する返答は「お父さんが悪いんだよ」であり、「ちょっと言い過ぎにも思えるけどお父さんが我慢すれば」というものだった。すなわち父は自らに非を求めなければならず、しかしその理不尽さを理解していた。「それってつまり、幸せじゃないってことでしょ？」そう続けた私の言葉には困り笑いしか返ってこなかった。
反面、父は意志が強く、はっきりとものをいう人間でもあった。それは私や姉に危害が及び

そうになった時。学校の先生のいい加減な態度や、母の強引な決めつけから子供を守るためとなると、父は途端に強くなった。窮鼠猫を噛む。いや、父は元から弱くなどなかった。ただ父の基準からして大事な事とそうでない事の区別が明確にあって、大事ではない部分をいくら責められても父は苦にしなかったのだ。調子に乗った誰かが大事な部分に手を出すと痛い目を見る。そんな場面を私は何度か見たことがあり、その度に父を頼もしく感じた。

大事なのは子供たちのこと、そのために自分は少々の不便など我慢できる。おそらく父はそう考えているのだと私は思っていた。私たちがこうむる不利益を避けるため、父は母と一緒にいるのだと。しかし今や父の基準が変わった。姉も成人し、私もそろそろだ。子供達が一人でやっていけるようになる、自分が守る必要がなくなる。そう思った時、父の中で母と一緒にいる必要がなくなった。父はそのことに気が付いたように見えた。あるいは私の知らないずっと昔から、この時を思い耐えてきたのかもしれなかった。

母のヒステリックな声が居間に響いた。それに対する父はあくまで冷静。二人の話し合いは中々実のあるものとはならなかったが、それでも少しずつ進んだ。どうせ一時の気の迷いだろう、いつもの調子ですぐに父は意見を引っ込めるに違いない。当初母の様子からはそんな気持ちが見て取れたが、段々と雰囲気が変わってきた。母の表情に時おり浮かんでいた余裕の笑み

が影を潜めたのは、どうやら父が本気らしいとわかって来たからのように思えた。
「子供たちはどうするの？　親が離婚なんて困るじゃない」
「申し訳ないが自分たちでどちらか選んでもらう。僕か、君か。それにしたってもう大きいんだ。そろそろ親の具体的な手助けは必要なくなる。もちろん困った時には喜んで手を貸す」
「家は？　ローンだってまだ残ってるのよ」
「そんな例は今時珍しくない。ちゃんと法律にのっとって必要な手続きを踏む。僕から言い出した離婚だから慰謝料も払う。ただし性格の不一致ってことで額は専門家に相談する」
「離婚なんて恥ずかしい。世間体も悪いし出世にも響くじゃない」
「確かにそうだろう。しかし僕はもうこれ以上我慢できない。それに世間体なら昔からあまり良くない。今もそうだが、君の声は近所に筒抜けなんだ」
「私が何か譲歩すれば良いんでしょ。はっきり言って」
「残念だがそういう段階じゃないんだ。今まで何度も、僕は君に改善を申し込んだ。でも聞き入れてくれなかった。お互い若くないんだし、これ以上時間を無駄にできない。僕は離婚を盾に何かを引き出そうとしてるんじゃないんだ」
　私は必要に応じて父に加勢するつもりだった。今の父なら私が差し伸べた手を取ってくれる

に違いない。半分は応援のつもりで、半分は先程の嬉しさを再び味わいたくて、私は居間に残った。しかし、しばらくすると私の助力は全く必要ないことがわかってきた。子供のためを思い離婚を恐れていた父は、今や姿を消した。そうなると形勢は完全に逆転。母は父の決意が本心であると認めようとしなかったが、父の気持ちは固かった。

これでは私がいる必要はない。それどころか私がいたら話しづらい内容もあり、むしろ邪魔なのでは。私はそう考えるようになった。すっかり忘れていたが今日は派手に転んで膝を擦りむいたんだった。私はそろそろ退散して、お風呂に入ることにした。

「私としてはどっちでも良いよ。離婚するかしないかは夫婦の問題だと思う。お陰様で私も大きくなったし身の回りの事ならどうとでもなるよ。あ、申し訳ないけどお金についてはもうちょっとすねかじりでお願いします」

私がおどけて下げた頭をヒョイと持ち上げると、そこには静かな怒りをたたえた母の顔があった。私に対する非難の目付き。あんたがお姉ちゃんみたいだったら、お父さんの勘違いを正せるのに。母の冷たい視線が降り注いだ。

「でも、できればお父さんについていきたいな。少しは家事もできるよ」

私は母の無言の叱責を無視して、さらに仕返しまで試みた。父の顔がパッと輝いたのに反し

て、母の眉間に一層深くしわが寄った。小中学生ならいざ知らず、私だってこのくらいの反撃はできるのだ。そのまま温度差激しい居間を後にしようと思った時、私は我知らず立ち止まった。

「そうだ。お父さん、お願いがあるんだ。会わせてくれない？　その女の人に。山本さん？　お父さんが再婚したい人」

私は思い付きそのまま、途切れ途切れに単語をつないだ。自分でも何を言っているのか理解に苦しむ、そんな突拍子もない発言だった。父は見たことのない複雑な表情を浮かべた。理解者を得た喜びと、そうは言っても諸手を挙げて歓迎して良いものかという疑問と。顔のそれぞれのパーツが別々に主張していた。母は完全に呆れていた。駄目だ、この子は。それは姉との比較で子供の頃から慣れっこな反応だった。

お風呂から上がり、髪を乾かし、両親の様子を気にしないふりで飲み物を準備して。自室に戻ってベッドに腰掛けると、私は手持ち無沙汰になってしまった。本を読むにしても、課題を片付けるにしても、集中できるとは思えなかった。

この一大事を笑い飛ばしてしまおうとして、モッチーに報告することにした。転んでしまっ

たどんくさい私に眉をひそめながらも、手を差し伸べてくれた彼女だ。思いがけない何か有用なアドバイスが聞けるかもしれない、そう思った。「ヤバイヨ、両親離婚するっぽい」、ちょっと他人事過ぎ？　「うちの親離婚するかも……」、暗いか？　いっそのこと全然関係ない話題から入って、途中でさりげなく話を切り出す？　まとまらない考えを形にしようと模索していると、音もなく姉の部屋のドアが開いた。

姉は無言で私の部屋に入ってきた。姉の部屋には私の部屋を通らないと行けない作りになっていて、私の部屋は姉にとって廊下みたいなものだった。そのまま階下に降りるのかと思ったが、姉はその通路にペタリと腰を下ろして手にした紅茶を時おり飲み、考え事をしている様子だった。

姉は私に何か話しかけるわけでもなかった。今夜のハプニングに対して姉なりに思うところがあったに違いないが、それでも無言。なら何故私の部屋に腰を落ち着けたのか。それは姉の、そして母のスタイルだ。どうかしたの？　その言葉を待つ。かと言って尋ねても、「別に」とか素っ気ない返事が返ってくるだけ。私はわりと昔からこのパターンに気が付き、以降は巻き込まれないよう、こちらから話しかけないようにしていた。

私は姉の誘い受けを無視して、モッチーへのメッセージを打った。色々考えては消してを繰

り返し、何気ないふりで本題を切り出す作戦を採用した。「それ大変じゃん！　もうちょっと慌てなよ」なんてツッコミが入るのを期待して。しかし返事は来なかった。そういえば今夜はデートだとか言ってたっけ。我が家の一大事に何を考えているんだか。

順調に姉の存在を気にしないよう心掛けていたら、姉が三回目のため息をついた。かなり深い、しかし私に聞かせるようなわざとらしい雰囲気のない自然なため息だった。あれ？　と思った時、私の意識は小学生の頃に飛んでいた。姉が父への態度を急速に硬化させていったあの頃の記憶が蘇った。

「私何だか馬鹿みたいだなぁ、と思って」

姉の言葉は力なかった。同意して混ぜっ返せる空気ではとてもなかった。

「文香に言ったっけ？　私がお父さんを嫌い始めたのって、周りの影響なんだ」

私は沈黙で先を促した。あの日も姉は一人語りだった。まだ物事をよくわかっていない幼い妹に対して、聞かせるともなく自己完結的な独り言をつぶやいた。

結局のところ、高学年とはいえ小学生の姉は年相応に動揺していた。周囲の友達と同じじゃなきゃいけない、同調こそ命。姉は一見気が強く見えるが、昔から他人の評価に敏感で輪から外れることを恐れるところがあった。そのため姉は父に突然きつくなったのだが、父の激しい

気落ちを目の当たりにして心が痛んでいたのだ。その表れがあの日の独白だった。しかし最終的に姉は初志貫徹。弱気を見せたのはあの一晩だけで、しばらくすると思春期父親嫌いの見本サンプルのようになった。

「ホント、馬鹿みたいなんだけどね。優しくなったのも周りがそうだからなんだ。何やってんだろ、私」

年頃の女子は父親を嫌う。それを知った姉は忠実に役割を果たした。根が真面目なのだ。そして真面目人間にありがちなことに視野狭窄に陥った。だから周りのみんなが歳を取り、方針転換をしたのにも気付くのが遅れた。「綾香あんたさ、なんでお父さんのこと毛嫌いするの？もう大学生でしょ、子供っぽ過ぎない？」、そう言ってきたのは高校の頃、姉と同じく父親うざい話で盛り上がっていた友達だったという。そこで初めて姉は知った。いつの間にかハシゴが外されていたのだ。

「その結果がこれ、ってことだよね？　明らかに私のせい。そりゃ途中からお母さんもノリノリだったけど、明らかにキッカケは私だし。どうすればいいのよ」

始まった時と同じように、姉の知らないところで全てが一変していた。成長し、物わかりの良くなった子供たちは親に理解を示し感謝する。アルバイト代で記念日にプレゼントを買った

り、お酒を飲みながらあらたまって礼を言ったり。「いい歳して反抗的なのはガキくさい」、そういった評価が付いて回る。思春期の頃に「両親と仲良いとか有り得ない」、と馬鹿にされたように。

それもまた周りに流された、ただのポーズでしょ？　とは言えなかった。私も最近似たようなことがあったのだ。「文香って随分授業きっちり出てるけど、もしかして良い子ちゃん？」、なんて聞かれたのは入学してしばらくたった頃。確かに周りを見渡せば、一見真面目そうな子も適当に手を抜いていた。もちろん真面目一辺倒の子もいたが、頭いいなぁと思う人ほどメリハリをはっきり利かせていた。ああ、大学生ってもっといい加減なものなのか。そう思った私は少し肩の力を抜いた。それが正しいことなのか首を傾げつつ、右へならえしたのだ。なので姉の気持ちも少しわかった。笑うことなどできなかった。

「どうしようもないよ。もう起こっちゃったことだから。でももしお姉ちゃんがどうにかしたいなら、こんなところで泣いてないで下に行って思ってることをぶちまけたら？」

それまで抜け殻のように落ち込んでいた姉は、私を睨むと無言で立ち上がった。いつもより大きめな足音が階段を降り、階下の話し合いにもう一つくぐもった声が加わった。

ちょっと冷た過ぎだったろうか。私は適当に相槌を打つ壁役に徹するつもりだったが、姉が

真剣に悩んでいたため本音で答えてしまった。もちろん姉とは長い付き合いだが、大きくなってからお互いの考えをきちんと話し合ったことはなかった。なので何とも気恥ずかしく感じてしまい、それでついつい地が出た。お酒を飲みに行って真面目モードに突入した二次会、曖昧に同意できずに水をさしてしまう空気の読めない私。「文香ってドライ過ぎない？」なんて言われて初めて自分の失敗に気付く変わり者の私。そんな調子で。

「言いたいこと言ってきた。ありがと」

いつの間にか姉が戻ってきていた。さりげなさを装いつつ、ぎこちなく感謝を表した姉は、涙の跡を残しながらもすっきりした顔をしていた。

「文香は？　どっち？」

「私はお父さんかな」

「じゃあ私はお母さんだ。一人にはできないし、そもそも私お母さんと似た者親子だからね」

随分と情報が省略された問いにも関わらず、不思議と私は姉の意図を察して返答していた。そのことに少々驚きつつ、やっぱり姉妹なんだと実感していたら、そのまま姉は自室に帰っていった。「おやすみ」と、いつもと変わらない素っ気なさで。

「お父さん気にしてたよ、文香のこと。心配だってさ」

扉が閉まるかと思った瞬間、姉は器用に背中をそらし顔だけ私の部屋に残した。

「変だよね。文香はこんなにしっかりしてるのに。ホント、分けて欲しいくらい」

それだけ言うと、今度こそ姉はドアを閉めた。私が心配？　思わずクエスチョンマークが頭に浮かんだが、まあ、今日もコケて帰って来たし、ある意味しょうがないか。

それにしても――。父と母は本当に離婚するだろうか？　ほんの数時間前まで存在すらしなかった疑問に対して、しかし私は確信を持っていた。離婚する。もし何らかの理由で婚姻関係が続いたとしても、父が意思を表明した時点で事実上終わりに違いなかった。私たちの運動会や発表会の前日となると父は全ての準備を済ませ、当日は遅滞なく粛々と予定をこなすだけの状態を整えた。料理だって、お出かけだって、父は万全の備えを怠らない。行動を起こす前に成功が揺ぎ無い状態を作り上げる人間だ。だから今夜、すでに全ては終わっていたのだ。父の心が母から離れ、離婚を決心するに至るまで全てが、家族のだれも知らないところでゆっくり着実に。今日という日はそれが白日のもとにさらされた日に過ぎなかった。

母も同意するだろう。プライドが高いから、というか実のところ結構打たれ弱いから。本気で拒否されていると理解した時点で心が折れてしまうに違いなかった。しかし何だかんだ言って共働きで、母だって順調に出世しているのだから、生活には困らないだろう。気持ちの切り

替えが早い母のことだ、案外すぐに立ち直るに違いない。
そうなると姉は母と、私は父との二人暮らしが始まる。この年齢で面会が制限されることはないだろうから、好きな時に連絡を取りあって、待ち合わせしてお茶飲んで近況報告。生活が激変するとは思えなかった。しかし、生まれてからずっと一緒だった家族がバラバラになってしまう。それは父の単身赴任などとは次元が違う、不思議でしょうがない気分だった。
私の物思いを打ち破ったのはスマホの振動音だった。「ガンバレ」、モッチーからの返信はそれだけだった。「他人事だと思って軽過ぎない？　ひどくない？」、そう返した私は軽い謝罪を予想したが、しかし全く違った答えを受け取った。「他人事だよ。私の親じゃないし。でも経験者だから少しはわかる」、そう言われて思い返してみたら、中学からの付き合いのモッチーには男親の気配がなかった。文化祭に来たのも面談も母親。
モッチーの話によれば両親が離婚したのは彼女が小学生の頃。とんでもない泥沼だったそうだ。ある日家族で出掛ける予定を父親がドタキャン。母親の我慢が限界に達し、モッチーを連れてデート現場に乗り込んだ。オシャレなレストランで言い争いを始めた両親を見たモッチーは察した。全てあの女のせいだ！　泣きながら相手の女性に食って掛かるモッチーのお陰で、流石の両親も以降は大人の態度で協議を続け離婚した。

モッチーとのやり取りを終え、布団に入った後も私は中々眠れなかった。日付が変わり、しばらく聞こえていた両親の話声も途絶え、しかし頭の中のモヤモヤが私を邪魔し続けた。

もちろん離婚のショックは大きかった。しかしそこに記された額面にふさわしい衝撃を感じていないことに、私は困惑していた。実の両親の離婚だよ？　家族が離れ離れなんだよ？　でも、しょうがないじゃん、それだけ。我ながら冷たい人間だと思っていたが、ここまでとは。姉の方がずっと人間的ではないか。私は私自身の冷静さに引いていた。ドン引きだった。

一方でモッチー。子供の頃の話とはいえ、彼女は世間一般で言う正しい反応をしていた。両親の離婚に戸惑い泣きわめく。全くもって正常な態度だ。

適切な表現ではないが私はモッチーや姉を羨ましく思った。私ももう少し感情的になれたなら、少しはすっきりするのだろうか。一般的でみんなと同じ反応でなければならない、そうは思わないが、それにしても私は怖かった。私には何か重要な部分が抜けているのではないか。このままドライで居続けて、ちゃんとした意味での大人になれるのか。父と同じように、子供が大きくなったらメリット無しと判断し、離婚してしまうのでは。それも父のような苦渋の決断、ではなく、あっさりと簡単にポイ捨て。それ以前に子供を可愛がることができるのか。誰かを愛することができるのか。

そうだ。ならば少し感情的になってみよう。多少無理やりでも良い。父とその再婚相手に不満をぶちまけたってバチは当たらない。気に入らなかったらそれこそ泣きわめいて、相手の人にビンタしてやる。あ、それってちょっと格好良いかも。八つ当たり気味ではあっても、それくらいの権利はある。私はそんな変な計画を立てながら、やっと眠りにつくことができた。

約束の日が来るまでの間、私は変に興奮したり、反対に怖気づいたりで忙しかった。モッチーは最初の一週間くらい優しかったが、私の態度がコロコロ変わるので徐々に相手をしてくれなくなっていった。「ふーん、好きにすれば良いんじゃない？　ところで昨日の課題終わった？」みたいな気のない返事が返ってきた。

再婚したい云々は父の勝手な思い込みで、相手には全くその気がないのでは、何てことも考えた。でもやっぱり父は手抜かりなく、自分が家を出る準備を着々と進めていった。そうこうしているうちに「山本さんが来るから都合を教えてくれ」なんて父に言われて、ついにその日がやってきてしまった。

父の再婚予定の女性、山本幸枝さんを一言で表すなら、幸が薄そう、だった。だから私は会った瞬間、なけなしの不満をぶつける気など失せてしまい、むしろこの女性になら我が家の平

凡な家族生活から少しくらい幸せを融通するべきでは、そう思ってしまった。

「本当に申し訳ございません」

幸枝さんは事あるごとに頭を下げた。待ち合わせのファミレスで初めて顔を合わせた時、自己紹介を終えた際、コーヒーを一口飲んだ後、何かの接尾語のようにペコリ。やがてそれはもう少し重苦しくない言い回し、「すいません」に変わっていった。「そんなに謝らなくてもいいですよ」と私が告げた後も相変わらずだったので、それは幸枝さんの口癖のようだった。つまりはそういう、常に周りに気を使い、頭を下げ続けるタイプの女性。

失礼だが謝り過ぎな印象を抱いた。そして父に似ていた。母に譲歩し、母を調子づかせてしまった父とどこか共通点があった。そういえば幸枝さんは配偶者からのＤＶが原因で離婚したんだっけか。申し訳ないがどこか納得だった。被虐的で、モラハラ気質な人間を吸引、増長させそうな雰囲気を彼女は持っていた。直感的にだが、幸枝さんと母は合わないな、と思った。

隣に座っていたのは幸枝さんのミニチュアだ。しかし息子さん、勇樹君は母親譲りの整った顔立ちの中に、母親とは真逆の強い意志を思わせる目を持っていた。

「どうしておじさんを大事にしないんですか？　とても良い人だとボクは思うんですけど、何か問題があるんですか？」

しばらく続いた当たりさわりのない会話の隙間をぬって、小学四年生とは思えない鋭さで勇樹君は核心をついた。

「勇樹、何てこと言うの！　お姉さんに謝りなさい」

幸枝さんの叱責を受けても勇樹君は引き下がらなかった。私自身は父の味方的ポジションのつもりでいたが、外から見れば母や姉の消極的協力者、父がないがしろにされるのを見て見ぬふりをしてきた人間だ。その鋭い視線からすると、勇樹君は私を敵と認識しているようだった。それは勇樹君の中で父が大切な存在になっている証拠であり、それ自体は、やるじゃんお父さん、だった。

勇樹君の視線は真っ直ぐ私を見据え、真実を知りたい気持ちと敵意とがないまぜになっていた。勇樹君は両親が離婚したときのモッチーと同年代。変に胡麻化そうとすれば、私は食って掛かられる立場だ。コドモ扱いや中途半端な返答を許さない真剣さが、彼の瞳に宿っていた。

「大事にしなかったのは、当たり前すぎて大事さに気が付かなかったから。お父さんの問題点は自分を後回しにするところ、かな」

我ながら小学生相手に何を言ってるのか、とは思ったが、勇樹君の真摯な雰囲気につられてしまった。そこでここ数週間、父の離婚宣言以降ああでもないこうでもないと考えてきたこと

がスルスルと口から流れ出した。勇樹君はポカンとしていたし、父も幸枝さんも驚いていた。私だって驚いたし。

「すいません。ちょっと難しくて、ボクにはよくわからないです」

「ああ、ごめんね。まあ結局言い訳にしかならないんだけど」

私はなるべく丁寧に、冗長になることを恐れず説明した。何しろ私自身整理が追い付いていなかったから、どうしても繰り返しが多くなった。「何もこんなところで」と父は話をそらそうとした。しかし幸枝さんが父の手を取り、「私も聞いてみたい」と遮った。二人の仕草があまりに自然なので、私はちょっとドキッとした。

結局私も含め、我が家はみんなあぐらをかいていた。母も姉も、そして父自身も。おそらく、我が家の平穏はその内部に不自然さを孕んでおり、その歪みは父に集中していた。あまりにも身近過ぎて父の大切さに気が付かなった母と姉は、ちょっとしたキッカケで父を攻撃するようになり、私はそれに消極的ながら加担した。父は父で我慢した。一過性のもの、自分が我慢すれば、などと思ったのだろう。しかしそれは長い年月をかけ徐々に我が家をむしばみ、取り返しのつかない大きな亀裂を生じさせ、最終的には粉々に砕いてしまった。

「そんなのおかしい！　おじさんは悪くないじゃないか！」

「そう。お父さんは悪くない。悪いのは私たち。でもお父さんを部外者扱いして、無関係ですって言うなんて、そんな失礼なこと私にはできない」
勇樹君の声は昼下がりのファミレスに場違いな大きさで響き、そのため周囲の注目を集めた。それに対し食い気味に発言した私の声は、静まり返った店内に恥ずかしいくらい通った。しかし躊躇してなどいられなかった。子供とはいえ勇樹君は真剣そのもの。私よりもずっと少ない経験値で両親の離婚、再婚という荒波を必死に乗り越えようとしていた。
「ごめんなさい。よくわからないや。わからないけどおじさんの家族の中じゃ、お姉さんが一番おじさんと仲が良い、ってのは本当みたい」
初めて見た勇樹君の笑顔は年相応の無邪気さで、かなり好感が持てた。女の子にモテるだろうな、なんて不謹慎な感想を抱いてしまった。それに応じるように私も肩の力を抜いた。
「私もよくわからないんだ。でも私なりに色々考えた結果、お母さんとお姉ちゃんにかなり非があって、私にもそこそこあって、お父さんにはちょっとだけある。そんな感じかな。正直お父さんは悪くないとも言えるけど、結局家族が離れ離れになるわけだし、みんながそれぞれ反省する必要があると思うんだ。だからお父さんの反省点はそこかなぁ、って」
「すまない、文香。お父さんがもっとしっかりしていれば、おまえにも迷惑をかけることがな

かったのに」

「私も申し訳ありません。家庭を持つ男性に相談すべきことではありませんでした。軽率でした」

店内の無言の注目を集める中、私たちのテーブルは限りなく暗く沈んだものとなってしまった。これじゃあいい見世物だ。

「ちょっと待って。じゃあボクは何を反省すればいいの？　ボクだけ反省できないなんて不公平だ！」

勇樹君の言葉が私たちを救ってくれた。その膨れた様子が可愛らしくて、一瞬の沈黙の後、屈託なく笑うことができた。なんだろう、天然なのか、計算して和ませたのか。どちらにせよ大した子だ。

その後の話は複雑な方向へは飛ばず、終始和やかだった。会話の中心は勇樹君。最近学校であった出来事を面白おかしく話して聞かせてくれた。時々私も口を突っ込んで、即席だけど姉の雰囲気を楽しんでみた。ああ、こういうの良いなぁ、なんて。そして直接的ではないにしろわかったことが一つ。勇樹君は父との生活を楽しみにしていた。

父の気持ちが固いことを知った母は潔かった。母と姉が実家に残り、私は近所で自活するこ

とにした。自活、とは言ってもモッチーが一人暮らしを始めるタイミングを計っていたので、これを機にルームシェアするのだ。父は東京に出て新たな生活を始める。しかし一人じゃないことは暗黙の了解だった。そこでは今私の目の前にあるような、仲の良い親子の時間が繰り広げられるに違いなかった。私はそこに自分の姿をそっと滑り込ませてみた。

我が家でおこなわれていたことと全く逆のことがそこにはあった。私たちが歪みを溜めていたように、父と幸枝さん、勇樹君は正反対のものを蓄えていた。それを愛と呼んでしまえば簡単だろうが、その響きから連想される激しさ、力強さとは異なる、何かもっと継続的な密やかさがあった。雪深い冬の日、囲炉裏端でおこなわれ家族の結束を強めたという山村の団欒のように。深雪の下で芽生えのためのエネルギーを蓄えるフキノトウのように。あるいは自らの重みにより密度を高める根雪そのものだろうか。

今となってはどうしようもない。しかしかつて父と母も、きっとそんな時間をはぐくんだに違いない。その結果の姉であり、私だ。そんなことを考え、私はいたたまれない気持ちに襲われた。

「あ、もうこんな時間だ。私そろそろ帰らなきゃ。幸枝さん、父をよろしくお願いします。じゃあね、勇樹君。またね」

慌てて辞退を告げた私に対し、勇樹君は別れを惜しんでくれた。急ぎ足で外に出ると、窓の向こうには私に向けて大きく手を振る幸せそうな家族が見えた。私は大人の余裕を装い、どうにか笑顔を作り軽く手を振り返した。

しかし颯爽とその場を後に立ち去ろうとし、数歩踏み出した瞬間、私は盛大に転倒した。慌てて身を翻した私の患部、この間とは反対の足の膝は痛々しい擦り傷が広がり、見る間に血がにじんだ。肉と皮で覆われた私の深部から湧き上がってきた、普段は意識しない真っ赤な液体。白日のもとにさらされた鮮やかな赤は歪みか、愛か。

「大丈夫お姉さん！　痛いの？」

すぐに勇樹君が駆け寄ってきてくれた。しかし私はにじみ出てくる血から目が離せなかった。勇樹君の心配ももっとも。私は我慢できず泣いていた。

「違うの。ちょっと痛かったのと。恥ずかしいのとで」

そうじゃないとわかっている言い訳の最中も、涙は止まらなかった。そんな私を父が抱き締めてくれた。子供の頃のように頭をなでてくれた。にじんだ視界の向こうでは勇樹君も涙目で、その手をしっかり幸枝さんが握っていた。

みんなの心配をよそに私は安堵していた。きっとこれですっきりできる。この一大事をしっ

かり受け止め、颯爽と先へ進むことができる。そんな予感がした。そのためにはもう少し、思いっきり泣くべきだった。心から、そうしたかった。

颯爽と雪解け道

文学ってなんでしょう？

片桐健文

この度は名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。頂戴した過分のご評価が、先生方の思い違いだった、などとならないよう精進いたします。

本文学賞を前にして、ひとつ避けては通れない問いがあります。文学ってなんでしょう？　理系人間の僕には大変難しい問題です。

せっかくなので、調べるのではなく自分で考えることにしております。紆余曲折の結果「言語学を用いて人間を表す学問である」というのが今の僕の考えです。これは文系と理系との比較によって導かれ「科学とは数学を用いて自然を表す学問である」という考えと対にな

表彰式での片桐さん

ります。例えば「自然落下の速度＝重力加速度×時間」と表されるように、「過酷な運命に翻弄されても、なお人間はこんなに気高い」とか、「日常のささいなことが切っ掛けで、人間はこんな恐ろしいことをしてしまう」なんて表すのです。

以上のような考えのもと、今回の話を書きました。「水面下で進んだ変化が、突然具現化して事件を起こす」ということを表したつもりです。その困った一面を道路の穴になぞらえて、良い一面を囲炉裏端で強まる家族の絆になぞらえたいと考えました。力不足により上手く表現できたとは言えませんが、深い雪の中で辛抱強く力を蓄えコツコツと物事を成し遂げる、という僕の抱く秋田県のイメージに合っていると考えました。

僕の考える文学がイイ線いってるのか、門外漢の見当違いなのか。それは今後の読書活動、創作活動を通して確認していきたいと考えております。

末筆ながら、今後ますます秋田県の皆様の読書活動が実りあるものとなることを祈念し、御礼の言葉とさせていただきます。

第6回ふるさと秋田文学賞　随筆・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞

遊びにおいでよ

えばた　えり・作

遊びにおいでよ

ヨガを極めるしーちゃんとは、中学からのつきあいだ。秋田から実家のある長野へ帰省するたび、私はしーちゃんへのおみやげ選びにうーんと首をひねった。なぜなら、しーちゃんは厳格な玄米菜食主義者だったからだ。

稲庭うどんは精製された白い小麦粉からできているのでダメ。きりたんぽは白米なのでパス。白砂糖を使ったお菓子は論外。黒砂糖のお菓子の場合は、「偽物」の黒砂糖を使っていることが多いので注意が必要。なにを買うにも、包装の裏側の原材料の表を細かくチェックしなければならない。もちろん食品添加物や保存料の類も入っていないほうがいい。

秋田は海藻の種類が多い。おみやげは、乾物のあおさやふのりに落ち着いた。山国では珍しいし、味噌汁好きなしーちゃんにはぴったりだ。けれど、値段のわりに見栄えしない。へんな見栄にとらわれるのは、大人になったせいだろうか。もちろん、しーちゃんはよろこんでくれたけど。

しーちゃんの住む一軒家は町の中心部にあり、私の実家から歩いて七、八分だ。長野に到着するや否や、私は父と母のご機嫌をうかがい、しーちゃんちへ出かける算段をした。というのは、いっしょに連れてきた二人の娘たちが幼いうちはなかなか自由な時間がとれず、私は実家でほぼ軟禁状態だったからだ。

「あんた、しーちゃんちへ行ったっきり、ちっとも、もどってこないんだから」

親の嫌味に耐え忍び、すきをねらい逃げるようにして出かけたこともなつかしい。ありがたいことに、娘たちの成長とともに、しーちゃんちでのお茶の時間はのびていった。

町は長野市の北東に位置し、北信五岳を背景にした田園風景が四季を通じて美しい。メインストリートをぬけ、しーちゃんの家へ向かう。手入れの行き届いた花壇を愛でながら、私はスキップしそうな気分で歩く。町のシンボルである雁田山（かりだやま）がすぐそこにあった。

しーちゃんは離婚後ダックスフントのリーベンと暮らしていて、私たち同級生は帰省するたび、しーちゃんちに入りびたっていた。

このころの私は、秋田での典型的な父親不在型の育児に音を上げ、長野の実家へよく逃げ帰っていた。しーちゃんはいつでも温かく迎えてくれた。

「うーん、たいへんだったね」

「それは、頭くるわ」

「そういうこと、あるよねー」

しーちゃんは、ひたすら私の愚痴に耳を傾けた。意見されることはめったにない。いっしょにコーヒーを飲みながら、じっくり話を聞いてくれるのだ。しーちゃんは、いつもそこにいて

くれるひとだった。

しーちゃんは自身の結婚生活で長く苦悩した経験があり、ゆえに、どこか達観していたと思う。ヨガの教えもあって、なにごとにも偏らず執着しない生き方を理想としていた。勉強熱心で努力家だった。愚直なほどまじめだった。自己を抑制しすぎて、ときに痛々しくさえ映った。もっと適当に、のんびりやりなよ。私はよくそう言ったものだ。

離婚直後のしーちゃんちを訪ねたとき、ユニセフのパンフレットが机の上に置かれていた。世界の子どもたちに月々一定額の寄付をするプログラムを紹介していた。

「子どももいないしね。この機会になにか始めようと思って」

しーちゃんはさらっとそう言ったけど、この時期経済的には相当きびしかったはずだ。実際その後長い間支援を続けていた。自分がしーちゃんの立場だったらけっしてまねできなかったと思う。しーちゃんは「すべて吐き出してスッカラカン」の状態で人生の再スタートを切った。そんなしーちゃんのあっけらかんとした潔さに、私は脱帽した。

ふだんは遠く離れていながら、たまに会ってじっくり話すこの距離感が、互いに居心地がよかったのだと思う。しーちゃんの常に変わらない誠実な態度は、私を救い十分にいやしてくれた。そして別れるとき、しーちゃんは笑顔で必ず同じことを言うのだ。

「コウさん（私の夫）によろしくね。家族のためにおいしいごはんを作ってあげてね」

おかげで秋田へ帰る足どりは軽くなった。

しばらくして、しーちゃんは長年勤めていた会社の仕事をフリーランスで請け負うことになり、家にいる時間が長くなった。私たち同級生もこの家でもっと長居することになった。私たちはこの家を「部室」と呼んだ。

そのころのしーちゃんは、ヨガのインストラクターとして自立を目指していた。講師として研修に招かれた会社で評判がよく、定期的なヨガ教室がスタートした。デザイナーに発注し、奮発して作ったというポスターは、アースカラーをベースにした洒落たもので、都会的で洗練されたおしゃれを信条とするしーちゃんにぴったりだった。会うたび、まぶしいくらい生き生きとしているのが印象的だった。

犬のリーベンが老衰で亡くなった後、しーちゃんは、家を空けられるようになったからみんなで秋田へ遊びに行きたい、と言い出した。私はさっそく布団の調達を算段したが、結局、メンバーの日程があわず計画は延期をくり返した。

このころのしーちゃんは、長年の玄米菜食主義を少しゆるめていて、私がおみやげに持っていったきりたんぽをすごく気に入ってくれた。きりたんぽ鍋のレシピのメモをつけてあげた

ら、実家で家族とともにおいしく食べてくれたという。以後きりたんぽが冬のおみやげの定番となり、長年のおみやげ問題が一息ついた。

「みんなで秋田へ行きたいなあ」

きりたんぽがよほど気に入ったのか、しーちゃんはときどきそんなことを言った。

「ああ、でも、今年の秋はせっちゃんにインドへヨガしに行こうって誘われているんだよね。やっぱちょっと無理かなあ」

「いつでも遊びにおいでよ。家も建てちゃったし、まだしばらくは秋田にいるからさ」

しーちゃんたちが来たらまず、家の窓から見える鳥海山を自慢する。それから、なまはげに会いに行き、角館に連れて行こう。抱返り渓谷と払田の柵も。近くの赤田の大仏も外せない。そして、地元の本荘マリーナへヨット見物。日本海の夕陽はぜひ見せたい。雲と溶けあう茜色の夕暮れどきを、砂浜で過ごそう。それは、山国の信州には存在しない、とっておきの時間だから。

その年の冬、私の書いた童話が絵本になり出版された。

しーちゃんは、さっそく長野市の書店に売りこみに行ってくれたという。お正月に会ったと

き、私の前にドヤ顔でその書店の担当者の名刺を差し出した。
「なーさんの絵本がちゃんと並んでいるか確認してきてね。それから担当者にあいさつしてくるんだよ」
そこは長野県下で広く展開している老舗書店の本店で、最も格式があり、かつ、地元ではなじみのある本屋さんだった。
しーちゃんちで、みんながお祝いのパーティーをしてくれた。しーちゃんの鼻息は私より荒かった。
「元スマップの吾郎ちゃんが作家さんにインタビューする番組、知ってる？　あれ、けっこうおもしろいんだよ。あたし、本はあんまり読まないんだけどさ。いつも観てんの。なーさんが有名な作家になってその番組からオファーがきたらさ、あたしマネージャーとして収録についていくからね。ああ、吾郎ちゃんに会いたーい」
「あたしもいく」
美容師のきみちゃんがすかさず話に乗ってきた。
「あたしもー」
都内で会社勤めのてんちゃんは、仕事の合間に収録に駆けつけてくれるだろう。

「早く有名になってよねー」
せっちゃんがにやけて言う。いつも身軽に国境を越えて出かけていくせっちゃんだが、このときちょうど実家に滞在していた。
「よし、みんなで吾郎ちゃんに会いに行こうね」
お祝いのケーキをいただきながら、私も調子に乗ってきた。目標はなにかと高いほうがいいに決まっている。
かくして、ありがたいことに、私の本は絵本コーナーと、律儀にも郷土作家のコーナーの二か所に平積みにされていた。絵本コーナーで自分の本を発見した瞬間、鳥肌が立った。周りは、「ぐりとぐら」を始めとした超ロングセラーや流行りの大人気絵本ばかりで、まさに後光が射していた。あまりにも畏れ多かった。格のちがいに、心底怖気づいてしまった。この複雑な胸の内はだれにも話せなかった。

昨夏、金足農業の吉田輝星くんが彗星のごとく現れた。
毎年夏の甲子園では秋田勢が一回戦突破してくれればいいなあ、と薄く願う程度に関心は寄せていた。しかし、薄い願いはかなわず、年々さらに薄くなった。けれども、金農はあれよあ

れよと勝ちあがり、県民はもとより全国からも熱い注目を集めていた。
私は長野の実家のテレビにくぎづけになっていた。父と母も巻きこんで、いっしょに騒ぎ浮かれた。名門私立を破って勝ち進む雑草軍団に連日酔いしれた。
そのころ、しーちゃんは病室のテレビで甲子園を観ていた。やはり私に感化され金農を応援してくれていたのだ。
前月に突然卵巣がんが見つかり、暑さの盛りに手術を受けて、お盆は病院で過ごさなければならなかった。私たち同級生はせっせとしーちゃんの病室に顔を出した。場所はちがっても、しーちゃんのもとに集まってお茶をするのはかわらなかった。
術後の回復途上で、ひまを持てあましていたしーちゃんは、すっかり金農にはまっていた。
「金農、すごいねー。高校野球なんてあんまり観たこともないけど、なーさんのおかげで楽しみができたよ」
「金農はね、選手全員、地元の子たちなんだよ。ほかの私立高校はみんな野球エリートを県外から集めてきてるんだから。全然条件がちがうんだよ」
御国自慢に力が入る私は、県外で金農ファンを増やすという使命に日々邁進していた。
「へー」

「そういうとこ相手に勝ち上がってきているんだから、まるでびっくり、マンガみたいな話でしょう。もう泣けてくるよ」
「ほんとだね。すごいよー」
目を丸くしてうなずくしーちゃんに、私は大いに気をよくし、連日金農ネタで場を盛り上げた。金農ナインの活躍はしーちゃんの表情をぐっと明るくしてくれた。
年が明け、二月の連休に長野へもどり、しーちゃんをふくめ同級生五人で温泉に一泊した。お正月に家族全員で帰省したばかりだったので参加をためらっていたら、幹事役のせっちゃんに「ぜひとも」と口説かれた。
日本列島は長い。秋田とちがって、長野では二月だというのにお天気がよくお日さまも出ていた。私たちはたわいもないおしゃべりをしながら、露天風呂で長湯した。抗がん剤の影響で髪が抜けキャップをかぶっていたが、しーちゃんはとても元気でまったく疲れを見せなかった。
「なーさん、脚のマッサージしてあげる」
夕食後部屋へもどると、しーちゃんが言った。おことばにあまえ、浴衣のすそから脚を差しだす。しーちゃんはまず、親指の腹や人差し指の関節を使って私の足裏のツボを十分刺激して

から、ふくらはぎに向かって丁寧にもみほぐしていった。オイルをたっぷり使い、私の足先からひざへしっかりとしみこませ、くり返しすりこんでいく。

「リンパ腺はね、皮膚の表面にあるから、そんなに強くマッサージする必要ないんだよ」

しーちゃんの手は力強く、巧みにしなやかに動いた。ツボがしっかり刺激され、私はすっかり満足し、安心した。

布団に寝ころびながらおしゃべりはつづいた。しーちゃんがにやけながら話題をふる。

「あたしね、なーさんにね、本を書いてもらうの。結末は絶対ハッピーエンド。で、その本がベストセラーになってね、映画化されたらキャスティングをどうするかって、なーさんと昨日話(はなし)してたん。そのことを温泉でみんなに相談しようと思ってさ」

前日にしーちゃんちへ顔を出したら、しーちゃんが体調の記録ノートを熱心につけていた。

「なーさんに、あたしのこと本にしてもらうから」

その参考資料にと真顔で言うので、私は、ああ、うん、と適当に返事をした。

が、お茶をしながら話はどんどんふくらんだ。本は百万部突破で、映画化必至。キャスティングをどうするか。自分役を演じる女優は自分で選ぼう。もうノリノリだ。二人でお腹を抱えながら、パソコンで四十代人気女優ランキングをスクロールした。

「うーん、どうしようかなあ」
首をかしげるしーちゃんに対し、私は即決即断。
「あたし、深津絵里。絵里ちゃん大好き。あ、でも綾瀬はるかもいいなあ」
「ほう、そうくるか。でもさあ、綾瀬はるかって三十代じゃない？」
「じゃ、三十代も圏内だ」
この続きは温泉で、ということになった。話をふると、みんなけっこうまじめに応じてくれた。大人になると人生を楽しむために是が非でも貪欲にならなくてはならない。
「あたしー、米倉涼子で」
きみちゃんがおすまし顔で手をあげた。うん、たしかに眼力はそっくりだ。
「あ、ちょっと待って。上戸彩もいいなあ」
え、それって……。どうよ？
そんな言葉をすんでのところで飲みこむ。おっと、私役は深津絵里か綾瀬はるかだったっけ。よけいなツッコミはなし。それが大人としての暗黙のルールだ。
「うーん、あたしはねー、どうしよう。韓国の女優さんにしようかな」
てんちゃんは韓ドラオタクだ。こうなれば多国籍キャストも悪くない。

「あたしね、菅野美穂がいいな。やっぱー、篠原涼子もいいかも」
しーちゃんが悩むそばで、日本の芸能界に興味のないせっちゃんはにやにやしていた。
「絞りこめなくてもいいじゃん。すごい人気女優ばっかりだから、オファーを受けてもらえるかどうかわからないし。みんな最低第三、第四候補くらいまで考えといてね。せっちゃん役は私たちで適当に決めてあげよう」
私の言葉に、素直にうなずく友らが愛おしい。今年はみんなで年女。猪突猛進だ。
妄想は、ストーリーにも及ぶ。
「医者役は吾郎ちゃんね。入院中に恋に落ちて、病気が治ってハッピーエンドってどう?」
しーちゃんの目がキラキラする。
「あ、吾郎ちゃんとは患者同士で出会うっていうのもありかな。二人で病気を克服して、やっぱりハッピーエンド」
あまりにベタな展開に首すじが薄ら寒くなったのは、私だけではなかった。
「それじゃあ、あまりにも、あれだからさあ」
珍しく異議を唱えたのは、ふだんは控え目なてんちゃんだった。
「しーちゃんが悪の帝国に誘拐されちゃうって、どう?」

「悪の帝国？」
しーちゃんが眉根を寄せ、せっちゃんは歯を見せて笑い、私は首をひねった。きみちゃんはへーっとうなずいている。
「悪の帝国に人体実験されて、病気が治っちゃうの。そこへ助けにくるのが吾郎ちゃん」
てんちゃん、いわく、韓ドラのストーリー展開は超アクロバティックで、現実逃避にはぴったりなんだとか。話はてんちゃんの独壇場となり、あらぬ方向へ広がっていく。
「それとも、吾郎ちゃんは未来人で、しーちゃんの病気治しちゃう、とかー」
最高にうっとりとした表情のてんちゃんに、私が茶々を入れる。
「タイムトラベルものもいいねー。なら、宇宙人に誘拐されて人体実験されて治っちゃうってのは？」
「うんうん。吾郎ちゃんもいっしょに誘拐されて、二人で逃げるの。超ド級ＳＦアクション、ハラハラドキドキだね。あー、それいい、あはは」
「こうなったら、製作総指揮はスピルバーグでハリウッド映画にしよう」
気がつくと、盛り上がっているのはてんちゃんと私だけだった。その他は空飛ぶ妄想についてこられない様子。しーちゃんはこちらに背を向けて寝ころんでいて、せっちゃんときみちゃ

んは眠そうだ。きみちゃんの大きなあくびを合図に、話はおしまいになった。
「なーさん、秋田からわざわざ来てくれてありがとう。みんなで温泉に行けてよかったよ」
しーちゃんとせっちゃんは、秋田で待つ私の家族にとおみやげまで持たせてくれた。あまりの厚待遇に、くすぐったいような落ち着かない気分ではあった。
別れ際、せっちゃんの運転する車で二人きりのときだ。せっちゃんが静かに告げた。
しーちゃんのガンが転移している——。

四月、しーちゃんが再入院した。春の鳥海山の写真を送ったら、とてもよろこんでくれた。
お見舞いに帰ると、しーちゃんは酸素ボンベをつけていた。医者の見立てを裏切りつづけ、周囲がびっくりするくらい元気だった。
しーちゃんが意気揚々と話してくれたところによると（ほんとうに意気揚々だった）、近ごろ酸素ボンベに保険が適用され、すごく利用しやすくなったそうだ。旅行先でも事前に備えつけてもらうことによって、宿泊も可能だという。
「というわけで、酸素ボンベしょって秋田へ行くからよろしくね」
「うん、おいで。これから暖かくなるから、ちょうどいいよ」

酸素ボンベは家の居間の中央に設置してもらおう。しーちゃんの行動範囲にあわせて管の長さを決めるというから、一階の和室に寝てもらえば風呂とトイレも近い。よし、なんとでもなる。

私はしーちゃんの薄くなった体を抱きしめた。調子がよくなったら、ほんとに秋田へ遊びに来るんだよ。

町は花であふれていた。お見舞いの行き帰りに通る千曲川の土手は、桜と菜の花がどこまでもつづいていた。その光景はまるで桃源郷のようで、目にしみるほどまぶしかった。しーちゃんの状態は日に日に悪化し、意識が朦朧とし始めた。

春が美しすぎた。桜吹雪が恨めしかった。風にさらわれる花びらをただ追いすがる気持ちで見つめていた。桜よ、散るな、と願った。しーちゃんをもう苦しませないで、と天を仰いだ。祈るほか、なにができただろうか。

亡くなる前日、しーちゃんは、お気に入りの主治医の先生に豪語したそうだ。

「先生、あたしの友だちが作家さんでね。あたしのこと、いつか本にしてもらうの。結末は絶対ハッピーエンド。それが映画化されたらさ、先生、本人役で出演してね」

医者役は決まった。

よろこんでいるよね、きっと

えばた　えり

夕方にかかってきた電話で受賞を告げられると、私はソファーにへたりこんだ。動揺し、手のひらに顔をうずめ、泣いた。感情がよみがえり、あふれていく。

あのとき、書くしかなかった。しーちゃんのことを書き留めておきたかった。なにもかもそのままに、ひとつも忘れたくなかった。

しーちゃんの笑顔と声。「おかえり」というやさしい響き。白いマグカップの温もり。窓から見える大きな栗の木。台所の無垢材の椅子。ずっと座っておしゃべりしているとお尻が痛くなって、だれかと交代したりして。いつのまにか足もとでうずくまって寝ている愛犬のリーベン。本場の直火用エスプレッソメーカーが小さくて、ガス台で

表彰式でのえばたさん

沸騰させると不安定で、気をつけて見はっていなければならなかったこと。ときどき倒れて粉が散らかって、あーあ、となった。新年会で酔っぱらった私が割ってしまったシャンパングラス。安物だって言っていたけど、ほんとうに弁償しなくてもよかったの？　今でも気になる。

しーちゃん、私の話にいつも大笑いしてたね。実際そんなにおもしろい話をしていたつもりなかったんだけど。手術のあとは笑うとお腹が痛いから、なーさんは出入り禁止、なんて言いながら、やっぱりお腹を抱えて笑ってた。ああ、もう痛いよーって。

私はすぐ、そのときイタリアにいたせっちゃんに連絡をとった。斜塔で有名なピサにいた。せっちゃんは私の求めに応じるように、つながっていてくれる。私は心底ほっとした。

スマホの画面越しに、石畳の古い街並みをいっしょに散歩した。ショーウィンドーの派手なデザインのセーターやリュックを映し、私の夫や娘たちにどうかとはじからおすすめしてくれる。

「おめでとう。しーちゃんもよろこんでるよ、きっと」

せっちゃんが力強く言った。

うん、絶対そうだ。

しーちゃんのよろこびようが見える。声が聴こえる。

今、心からそう思える。

第6回ふるさと秋田文学賞　随筆・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞佳作

三度目の成人式

那須　厚・作

三度目の成人式

昨年の七月に還暦を迎えた。その誕生日を機に会社を辞めることにした。定年退職である。ガラスメーカーの系列会社で、主にガラスの販売や新製品の普及を担当していた。二九年間の勤続年数だった。三一年前三〇歳の年に家族と共に埼玉から秋田の実家へ戻ってきた。当時の秋田はまだバブル期の名残があり、景気は悪くなかった。友人たちの力添えもありこの会社をお世話いただいた。一九八九年初期の頃である。

元々は池袋にある印刷会社へ勤めていた。昔から印刷業界は景気に左右されない業種といわれていた。それでもバブルの頃は不動産関連の印刷物やチラシを中心に、宝石や大手百貨店で扱っている高額商品の広告などを手掛け、多岐にわたり活況だった。多数のデザイナーを抱え、企画からモデルの手配、商品のカメラ撮りなど、印刷物ができるまでの全てを総合的に扱っていた。その中で私は、チラシを作製する部署の工務部に所属していた。チラシ印刷の発注や、出来上がったチラシを所定の場所へ期日時間内までに納品する工程管理や製品管理、金額交渉などが私の業務だった。工程の途中では商品のプライス変更や写真の入れ替え、校正ミスなどの手直しが入り、いつもぎりぎりの納期となる。時間に追われる毎日だった。繁忙期ともなれば自宅へ帰れない日が数日続くこともあった。そうでなくとも週に一、二度は会社へ泊っていた。そのかいあって仕事振りと業績が評価され、若くして係長に昇進した。暫くたって、

他社の印刷会社から声がかかり、その会社へ課長職で引き抜かれた。それほど広い業界でもないのでお世話になった会社にはきちんと仁義を切り、円満な退社となった。退職後もその会社から定期的に仕事を回してもらえる事になり、応援していただいた。ところが半年も過ぎた頃、移籍先のオーナー社長からさらに業績を上げてくれと、経験のないチラシ製作部門を任された。移籍を依頼してきた時の平身低頭な社長の姿はもうどこにもなかった。社長と一従業員の立場で、何の相談も無く鶴の一声で決められた事案だった。課長職としてのノルマは充分満たしていたが、そこで初めて社会の厳しさを思い知らされた。そして、やりなれない仕事とノルマ、時間に追われる毎日に耐え切れなくなり一九八八年三月二一日山手線目黒駅で、今で言うパニック障害を起こす。

六本木で打ち合わせをし、その内容を製版会社へ伝えに行く途中の出来事だった。急に手足が震えだし脂汗が出てきた。ざわざわと心が勝手に暴れ出した。何かを叫びそうになった。何が起きたかわからないまま、それを必死にこらえる自分がいた。我慢しきれず、走る電車から飛び降りそうな衝動に駆られた。それを懸命に阻止するもう一人の自分がいた。頭の中が、今抱えている不安で一杯になっていた。嵐の前の積乱雲のように次から次へと湧き上がってくる不安を、自分勝手にまた頭の中で増幅させ、さらに強い不安に塗り替えた。そして、それを制

御できないでいる私を、そのパニックは容赦なく漆黒の闇の中へと引きずり込んでいった。車内で一人、心の深淵の中で放心状態となっていた。時間にすれば三分もしない出来事だった。目まぐるしく回転する不安の連鎖に耐え切れなくなり、呆然としながら停車した目黒駅に降りた。

そして、そこで鬱になった。

それも今だから言える事である。当時は自分がどうなってしまったのかわからぬまま強い不安に襲われていった。あのわずか数分で自分の世界が一変してしまった。日常の景色が無機質なモノクロの世界となり、色も音も、まわりの景色もみんな何処かへ行ってしまった気がした。頭の中ですべてが遮断されたようだった。何もやる気がわいてこない。あの突然のパニックに、いつまた襲われるかと思えば怖くて外にも出られない。そして抱えている不安は何一つ解決を見ていない。結局、程なくその会社を辞めることになった。

同時に電話帳であちらこちらの病院を探した。まずは今この状態が何なのかを知りたかった。自宅でゴロゴロと横になり、天気が良いのに寒気を感じるようなそんな毎日だった。精神科を探したが電話帳にあるそれは病院というよりは施設であり、こちらが具体的な症状を伝えるとそのような治療はここでは行われておりません、とどこも同じに断られた。隣町に内科精

神科とうたった個人病院があったので、すがる思いでそこを訪れる事にした。当時、私の家族は専業主婦の妻と、幼稚園に通う長男と三歳の次男の四人家族だった。突然起きた生活の変化に、妻も内心気が気ではなかったはずだ。幸い隣に妻の姉夫婦が住んでいた。だから精神的には多少なりとも助けられていたと思う。子供を姉さんに預かってもらい妻と二人でその病院へ向かった。

初老の男性医師から問診を受けた。聞かれたことにはできるだけ丁寧に答えた。その時の状況も事細かく説明した。診察が終わりいくつかの薬を処方してもらったが、結局は何の病気かはわからずじまいだった。それでも出された薬を言われたとおりに飲み続けた。しかし、いつになっても何一つ改善は見られなかった。相変わらず一人で出かけることもできなければ、やる気も起きてこない。ずっとモノクロの世界のままだった。気晴らしにと、弟や家族と共に動物園へでかけたこともあったが心はいつも別の所にあった。大好きだったゴルフにも連れていかれたが覇気も無ければ声すら発せられない。抜け殻のような状態だった。状況はさらに悪化していた。その頃は洗濯物を干すロープを見て自殺を図る自分を想像し、自殺のニュースを見ては自分と重ね合わせ、その衝動にいつ駆られるのだろうと怯えるような、そんな毎日を過ごしていた。クラシックで流れるバイオリンの音が耳障りで嫌いだった。風呂に入った時の温度

差に、急に緊張が走って湯船から飛び出たこともあった。頭の中はいつも自分で自分を制御することだけに使われていた。

疲れていた。限界だった。

生活ができなくなる前に家族で秋田へ引き上げることにした。両親の勧めだった。そして、今一度秋田の大学病院で診察してもらう事にした。その時もまだ自分は何の病気なのかわからないでいた。病院へ行く前の晩のことだった。私の母と妻が食器を洗いながら話している会話が、寝ていた私の寝床まで聞こえてきた。「最初の病院で精神分裂症と診断されていたことは、まだ本人には伝えていないんです」「でも明日はそこのところをもう少し詳しく先生に話して、治療法なり、私生活の在り方などを相談してみた方がいいわよ」こんなやり取りだった。初めて病名を聞いて少なからずショックを覚えた。布団を出て台所へ行きこれまでの成り行きを尋ねた。二人は少し驚いた様子だったが、言葉を選ぶようにして今までのいきさつを話してくれた。私の知らないところで連絡を取り合っていたという。両親と妻との間で相談していたらしい。少しホッとした。こんな状況を妻一人に背負わせているという罪悪感があった。いきさつを聞いてほんの少しだが後ろめたさから解放された気がした。同時に自分の症状を知ることができ、とりあえず現在の立ち位置がわかったという事で気持ちが落ち着いた。しかし

それは東京ドームに裸電球が一つ灯った程度で蛍の灯りのような、気休めにもならない出来事でしかない。ただ漆黒の闇の中にぼんやりと何かが灯ったのは事実である。毎朝、目覚めたと同時に始まるモヤっとした怠惰な感覚は、体も心も一瞬にして骨抜きにし、心の奥底へと引きずり込んでいく。兎にも角にも今のこのような生活から一刻も早く抜け出したいと強く思った。

翌日、大学病院の先生に診ていただいた。ベテランの先生らしくテンポよく様々なことを尋ねてきた。生い立ちから今までの全てを聞かれ、自分も丁寧に、詳しくそれに答えた。所々で、その時々の自分の心情も聞かれた。数十分かけた問診が終わり、最後に先生が話された言葉で救われた。「あなたがよその病院で言われた病名であれば、物事に対してこんなに理路整然と説明などできません。極端なことを言えば、もしそのような患者さんであれば、自分が病気である事すら認識していません。あなたの病気は鬱病です。それもごく軽いものです。風邪にかかった程度ですね。ですが心の病というのは他の病気と違います。軽い風邪程度の症状だとしても治るにはかなりの時間がかかります。それに疲れやすくなる。だから慌てることなくマイペースでじっくりと構えてください。少しずつやれることを増やしていってください。それには規則正しい生活が一番です。朝起きて布団をたたむ。靴を揃える。そんな小さなところ

から一つずつ重ねていってください。そういう病気ですから」

目の前が明るくなった。思わず妻と顔を見合わせた。

「頑張らなくていいです。今のあなたの精神状態は、極めて細い蜘蛛の糸のようで非常に敏感になっています。何かが起こるのを恐れてあらゆるものにびくびくしています。何をするにも自信がなく、気持ちはいつも、あの時の不安な発作がいつ現れるのか、それ一点に集中しています。不安な気持ちに駆られ、見えないものを見ようとし、聴こえないものを聴こうとしています。それがまたあなたを追い詰めています。一度心の中の不安を、どんな些細なことでも構わないので全てを書き連ねてみてください。人に言えないようなことでも、自分自身で紙に書くことで心が少し軽くなります。それを冷静に眺めれば、なんでこんなつまらない事で悩むのだろうという事柄が必ず出てきます。悩むくらいならこれを放棄すればよい、とか、誰かに頼んで断ってもらおうとか、今は病気だから甘えさせてもらい、治ったらその時にお礼をすればいいとか、いい意味での開き直りができるようになれば間違いなくそれは快方に向かっている証拠です。そのようにしなければならないという几帳面な気持ちと、辺りに気を使いすぎて生じる不安との戦いで心が疲れます。そこを焦らず少しずつ改善していってください。いや、慣れていってください。そういう病気なんだ、と受け入れるところから始めてください。あなた

自身、良い人を振舞わなくともよいのです。あなたが思っているほど人はあなたを意識していません。失敗を恐れないでください。風邪ひきがくしゃみをするように、そんな小さな失敗はあって当然です。小さな失敗はこの病気のくしゃみだと思ってください。誰だって、風邪をひいている人のくしゃみをとがめる人はいないでしょう。失敗して当たり前、そういう病気なのですから。だから怖がらずに頭で考えていることの少しでも行動に移してみてください。あなたのような患者さんは世の中に大勢います。世の中の三分の一の人は多かれ少なかれそのような症状を抱えている、というデータもあります。だから安心してください。大丈夫です。必ず良くなりますから。」

その言葉に励まされて数カ月後、今の会社へお世話になった。何もわからない私はとりあえずトイレの掃除をした。朝のお茶出しをした。それくらいしかできることはなかった。今であれば露骨で恥ずかしく、照れ臭く映るそんな振る舞いが、当時は素直にそれができた。なぜならそこまで頭が回っていなかった。ただあの発作が現れないようそれだけを念じて、その不安を紛らわすだけの行為だった。ジッとしているのが怖かった。だからそれは毎日、丁寧に時間をかけて行われ、私の日課となっていった。余計なことばかりを考えている頭の中も、体を動かしていると少しは楽に感じられた。回数を重ねていくうちに少しずつだが集中して事にあた

れるようになった。頭の中のモヤモヤもリフレッシュされていくような気がした。会社に相談し、ガラス工事の作業現場へ一緒に連れて行ってもらえないかお願いしてみた。何もわからないのだからそのような経験も今後の営業活動に役立つだろうという事で、少しの期間、見習いのようにして現場へ配属された。重いガラスを一緒になって運んだり、資材の片づけをしたりと、やれることが少しずつ増えていった。知らぬうちに、トイレ清掃やお茶出しに費やされていた時間は、生産性のある時間へと変わっていった。同時に昔培った、合理性や社交性などが自分の中で芽生え始めていくのがわかった。意識が仕事へと向き始めているのを感じていた。

そしてそれらは確かにその後の営業活動に役立った。最初は安定剤をポケットに忍ばせ、車に乗って営業に回った。県内の建設現場が主な営業場所だった。車窓から見える秋田の海や山の景色が気持ちを和らげてくれた。雲の上に墨絵のように現れる雄大な鳥海山や、純青の海と青空に挟まれくっきりと浮かび上がる男鹿半島など、眺めているだけで開放感に浸ることができた。周りの景色は季節が移ろうごとに確実に私の心の中の澱(おり)を消し去っていった。

少しずつ仕事を覚えていくと同時に忙しさも増してくる。見積もりの場面ではコストや利益、施工性などを考慮する。池袋の工務時代にやりなれた業務が復活したようで涙が出るくらい嬉しかった。その頃には底なしの穴も、漆黒の闇も何処かへ消えてなくなっていた。朝起き

て考えることは不安発作への怯えではない。今日一日の仕事にしっかりと意識を集中させていた。

春先ともなれば我先にと百花繚乱を極める草花や、いったい緑にはどれだけの色の種類があるのかと、思わずため息が漏れる五月の山々。青空の下、初夏を告げる優しい風の中でゆっくりと流れる純白の雲、それを映し出す田んぼの水鏡、どれもが鮮やかで新鮮に感じられた。

モノクロの時代からやっと解放された。

そうなるまでに四回ほど千秋公園のお花見を経験した。

仕事場の同僚たちや、お付き合いさせていただいたお客様からの温かい励ましがあって、定年まで勤め上げることができた。子供たちも成人してそれぞれに家庭を持っている。幸せですかと聞かれればハイと素直に答えられる。

家族で秋田へ引き上げてきたあの時、失望と不安の中で乗車した新幹線を今でも思い出す。何も知らない子供たちは車内ではしゃぎ、人形のように生気のかけらもない自分がぼんやりとそれを眺めている。疲れ切った妻がにこやかに子供たちをあやしているが、目は笑っていない。すぐに車窓の遠くを眺めていた。それを思い出す時、普通に暮らしていられる今がどれだけ幸せな事か。

家族で秋田に戻り、生活も安定してきた頃、世の中はにわかにＩＴブームを迎えていた。時代が変わろうとしていた。その中で当時、この影響を真っ先に受けたのが印刷業界だった。レイアウトから製版に至るまでパソコンのマウス一つで片付けられるそんな時代になっていった。情報はチラシではなくネットで配信され、今まで印刷に携わってきた、人も、会社も、一瞬にして無になるような爆弾でも落とされたかのようにしてたちまち委縮して枯れていった。あっという間だった。

今から数年前、以前勤めていた池袋の印刷会社が倒産した事を知った。他社に引き取られることになったという。時代の流れを感じると共に、自分があのまま、何事も無くあの業界にいたならばどうなっていたのだろうと、ふと考えることがある。

先のことなど誰もわからない。しかしあの時の忌まわしい経験があって、今ここに自分がいる。二度と立ち直れないかもしれない人生の挫折から、家族や仲間の支えがあり立ち直ることができた。思えばあの病気を患ってから人に対して優しくなれた気がする。若さに任せて自分の考えをストレートに、想ったままを口にしていたあの頃、病気を境にそれが変わっていった。言葉を口にする前に、一度自分の頭の中でかみ砕いてみる。慎重に、相手の話をよく聞いたうえで受け答えをする癖がついた。優しさと謙虚さを知った。それをあの病気から教わっ

た。人間万事塞翁が馬、古人の諺が蘇る。禍福はあざなえる縄のごとし、こんな諺もある。この歳になりその言葉を実感している。悪いことばかりではない。さりとて良いことばかりも続かない。モノに表と裏があるように、灯りに光と影があるように、およそ人生もそのようなものなのだろう。

山の雪が融け、そのせせらぎが川となって日本海へと注ぐ。それは太陽の陽ざしの中、水蒸気となり真っ白な雲になって空に浮かぶ。浄化されたその一滴は雨となって地上へ降り注ぎ、あらゆる生物を育み、そして枯らしていく。やがてそれはまた雪へと変わり、カンバスの絵を描きなおすようにして辺り一面を白一色に埋め尽くす。自然は人間ごときが作り出したモノや常識をあざ笑うようにして、そんなものには一瞥もくれず、あらゆるものを包み込み、そして何事もなかったかのようにして毎年一つの物語として完結させていく。正も誤もなければ、善も悪もない。水は雄物川の橋の下を幾度となく流れ、その中で時間だけが過ぎていく。そんな自然の流れの中で季節の移ろいは、昔から何一つ変わらない営みを繰り返すだけである。人はその時間の中を行ったり来たりしているにすぎない。それをこの目で見てきた。秋田に居を構え、秋田の自然から様々なことを学んだ。

バブル期を都会で過ごした自分にとって、あの賑やかな喧噪も自分の人生の彩の一つだっ

た。充実した毎日の中、あそこで学んだことも沢山あった。いろいろなことがあったが、あの頃の、生き馬の目を抜くような都会の中で必死に生きていた自分を誉めてあげたいと思う。あの時抱えていた不安も、今ではもう思い出せないがきっと些細なことだったのだろう。それでもそれは、一生懸命生きていた証でもある。目黒駅での出来事も、私の人生の中での必然だったのではないかと、今になって振り返る。あの日、今の結末を知る目に見えない、どなたかのお導きが、そっと私の背中を後押ししてくださったのかもしれない。

六〇歳という三度目の成人式を迎えて一年が過ぎた。初めて人生を振り返ってみた。千秋公園に咲く桜の古木には及ばないが、私の人生の中にもそんな木の節があった。もう一花などとは思わない。ただ穏やかに、季節の風に吹かれていられれば、それが一番いい。

The answer is blowin' in the wind（ボブ・ディラン「風に吹かれて」より）

本当はね……

那須　厚

きっちりと角の整った真っ白な豆腐、一日に数丁しか作ることのできない貴重な品で、二度と口にすることの無い幻の逸品。素人の私にとって今回の受賞はそんなイメージだった。同時に赤裸々に描きすぎた内容に戸惑いを覚えた。しかし、それもすぐに喜びへと変わっていった。作品は自分に起きた鬱の話だが、それをきっかけに半生を振り返り、それが縁で、作品の締めくくりのようにして今回の受賞となった。これもお陰様のお導きと勝手に解釈し、改めて感謝した。何より嬉しかったのは、人生まだ終わっていない、新たなお陰様も出現した、もう少し書き続けてみようと、励みになった事である。有難うございました。そんな折、受賞のことばを依頼された。偶然のように

表彰式での那須さん

して頂いた今回の賞である。鬼平犯科帳に出てくる急ぎ働きの盗人のように、一刻でも早く、馬脚を現す前にこの場を立ち去りたかった。しかし世の中、そううまく事は運ばない。（何せ自分の作品の中でそれを書いている）あざなえる縄が、鉄の鎖となって私の足に絡みついてきた、そんな気分だった。しかしせっかくの機会だ。「この際、思いきり馬脚を現し駄馬の足跡を残そう、秋田を舞台にした作品のあらすじでも書いちまえ」と開き直ることにした。（それも大事と作品に書いていたし）

さて、面白い作品にはいくつかの共通点があるように思える。上流社会を覗き見るようなカオスの中に、わずかな色艶と性の雰囲気が漂う。ミステリアスで、時に少し宗教がかったりもする。そんなサスペンス。例えばこんな具合だ。「国会議員、三竹の娘（比内子）が姿を消したのはミス秋田で優勝した日の夕方だった。犬の散歩に出たきり自宅へ戻ることはなかった。翌日、愛犬の秋田犬「ブリコ」が男鹿の真山神社で保護された。その傍らには、寿司はたはたと味道楽が一本。手掛かりはそれだけだった。秋田県警の懸命な捜査もむなしく4年が過ぎた。その日三竹は千秋公園にいた。料亭「松下門」で秋田芸妓のお披露目式がある。そして、そこに現れた芸妓こそが、愛娘の比内子だった。「何故だ！」みたいな……とかね。美辞麗句を並べた高尚な文章は書けそうにないが、書こうとする自分がワクワクするような、馬鹿臭いけど面白いと言われる、そんな物語を今度は書いてみたい。本当はねっ！

選

評

©三宅史郎

一番書きたいことを芯に

内館牧子

今回は外国からの応募も含め、小説部門で66編、随筆・紀行文部門で66編が集まりました。面白いことに、男女別応募者数では男81人、女51人と、男性の方が30人も多いのです。

たとえば文章講座にしましても、色んなことをテーマにした文化講座やイベントにしましても、また、私がノースアジア大学で定期的に開いている市民講座でも、多くの場合、女性参加者が男性参加者を圧倒的に上回ります。私が関係している幾つかのエッセイやシナリオなどのコンテストでもそうです。この現象は、どうも全国的な傾向のようです。

男性応募者の方が多いこの文学賞、秋田という風土や気質に、男たちがどこかそそられるのかもしれません。

そんな珍しい「ふるさと秋田文学賞」ですが、最終選考に残った作品には、さすがの力や魅

力を感じました。小説は66編のうち6編が最終に残り、随筆・紀行文は66編のうち4編。共に狭き門を通って来たことが納得できます。

まず全体を通して、私が感じた注意点をあげておきます。今後、応募しようと考えている方々にも、何かの役に立てばと願っています。

小説に関してですが、ひとつは「話が強引すぎる」ということです。

これはよく「作家都合」と呼ばれますが、作家つまり執筆者が、都合良く話を展開させてしまうことです。たとえば出会うはずのない二人が、都合よく出会ってしまったり、行きたくても行ってはならない場所から、なぜか突然、行かなければならない事情が飛び込んで来たり。これは読者にすぐ「ありえねー！」とバレます。作家の都合で動かさずに、登場人物の心理で動かしてください。

もうひとつは、後から説明が入ることです。

これは「後説（あとせつ）」と呼ばれるものです。たとえば、どうも主人公の動きが納得できないなァと思いながら読み進めて行くと、後になってから主人公の過去や背景が出て来たりします。もちろん、状況を敢えて伏せておき、後で明かす方が効果的な構成もあります。そうではない場合、後説でしらけてしまう場合も確かにあるのです。

三点目は小説の体(てい)をなしていない作品があります。

エッセーのような、論文のような作品です。小説は事実の羅列でも検証でもありません。作家が作りあげた登場人物がその心理によって動き、物語が展開していく。それを念頭に置いて頂きたいと思います。

随筆・紀行文についての問題点は、一つ感じました。

それは、出来事を時系列で並べ、そこに濃淡がなく、執筆者は何を一番書きたかったのかが分からない作品が目立ちました。これは極論すれば、「9月の次は10月で、10月の次は11月で、11月の次は12月で、その次は1月で……」と書き並べているようなものです。

自分は何を一番書きたいのか。その思いの在処(ありか)はどこなのか。そこを色濃く書いてほしいと思いました。

小説の部の文学賞は「ＢＡＳＥＢＡＬＬ　ＣＬＯＵＤ」。リズムのある文で、非常にうまい。構成もさすがで、全員一致で文学賞に選びました。ただ、残念にも、話を盛り込み過ぎてしまっています。そして、自分のうまさを自覚している匂いが少し感じられました。でも、私はこの人の今後に、とても期待しています。

佳作の「颯爽と雪解け道」は、母親がなぜそんなに夫を嫌うのかわからない。典型的な「後

説」で、後まで引っ張る理由がわかりません。ただ、夫の状況をこのようにしたことは、非常にいいと思います。実際、よくあることなので、読者は「あるある」と引きずり込まれるでしょう。

選にはもれましたが、私は「屋根」に高得点をつけています。作りすぎておらず、単純な話なのに読ませます。しかし、これはエッセーではないかという意見が出ていたことも事実です。

随筆・紀行文の部では、「遊びにおいでよ」が、他を引き離しました。あたたかい女たちの佇(たたず)まい、そして秋田と長野の美しさを、決して饒舌(じょうぜつ)にせずに描いています。特にラストは秀逸です。もっと濃淡がつけば、さらによくなったと思います。

佳作の「三度目の成人式」はよく書けています。構成もよく、一気に読ませます。しかし、やや平板に感じるのは、濃淡がうまくついていないことも一因でしょう。最も書きたいことを芯に置く。それに注意すれば、もっと生き生きしたはずです。

まだ応募したことのない方(かた)は、ぜひ来年書いてみてください。男たちが好むらしき秋田の風土・気質は、女性にとってもいいテーマになるはずです。

〈脚本家　秋田市出身〉

構成力と整理がいい作品を

塩野米松

いい作品が多くなりました。うれしいことです。

小説も随筆や紀行文も書き手が創って、読者に読ませるものです。創作なのです。ですから、体験や調べたことをそのまま書くということではないのです。もちろんそうしたことも核にはなるでしょうが、できあがった作品のなかでは、それがほんとうかどうかより、意外性があり、おもしろく読ませる工夫がされていて、人をうつものがあることが望ましいのです。創作の大きな意図はそこにあります。

もう一つ文章を書く上で必要なのは、思ったり考えたことを、読める文章にする技術です。これはもって生まれたものがある人以外、訓練で磨き上げるしかありません。

小説の部のふるさと秋田文学賞は『ＢＡＳＥＢＡＬＬ　ＣＬＯＵＤ』（上月文青）でした。部

屋の片づけの途中で見つかった本『野球雲の見える日』と、田舎の同級生から来た還暦祝いの誘いから物語が始まります。高校の野球部だったときの落球事件という傷、母に降りかかった振り込め詐欺、棄郷、都会に呼んだ母のその後、嫁と姑、なじみの中華街の店、離婚……。さまざまな要素が織り込まれています。

物語の構成、仕組みのうまさはみごとです。文章も書き慣れており破綻がありません（職業がフリーライターだそうです）。選考委員全員異存なしの授賞決定でした。あえていえば、詰め込みすぎです。はじめの本の説明などくどく思われる部分もあります。50枚という短編の仕組みは簡素さが大事です。作品づくりにかかるとさまざまなネタがアンテナにひっかってきます。それらを選り分けて、必要分を汲み取っていくとすっきりとしたものになります。力のこもったすばらしい作品でした。

佳作は『颯爽と雪解け道』（片桐健文）。妻と娘二人、その家の夫が離婚を決心するに至る話を末娘の目から綴った小編です。雪解け後の穴ぼこで転んで擦り傷を負うようなちょっとコミカルな女子大生の設定がおかしみをうみだしています。引用資料に「穴ぼこ等の危険な状況を発見したらすぐに電話を！」というネットで見かけた言葉があげられていました。この言葉

をきっかけに、物語を構成した発想がいいですね。上質な笑いは作品を豊かにします。妻と上の娘に冷たくされてきた夫の離婚宣言が引き起こした事件のなかに、それぞれの思いや考え、人柄がよく出ています。途中不必要な説明文が入っていますが、説明や生の資料は小説の流れを壊すことがあるので、注意が必要です。次の作品への期待が膨らみます。

随筆・紀行文の部のふるさと秋田文学賞は『遊びにおいでよ』（えばたえり）。長野県から秋田に嫁いできた著者は、帰郷するたびに親友のしーちゃんに会いに行くのが慣わしです。古い友人達もやってきます。みんなで愚痴を言い、おしゃべりを楽しみます。悩む私を励まし、最初の絵本を売るのに力を貸してくれたのもしーちゃんです。長野県には海がありません。友人達に自慢の日本海に沈む夕日を見せたい。その気持ちがこのエッセイのタイトルです。しかし、親友のしーちゃんは病に。そして秋田には遊びに来れなかったのです。亡くなった友人への思いを込めた作品は胸をうちます。

佳作は『三度目の成人式』（那須厚）。著者は30歳の時に心の病を患い、故郷の秋田へ引き上げてきました。友人や秋田の自然のなかで病気も治りました。三度目の成人式の60歳を迎えた著者が自分がたどってきた道を振り返りまとめたエッセイです。初めての作品とか。家族

や医師、同僚達への感謝を込めながら書き上げたものです。その素直な気持ちが伝わってきます。「よかったですね」と言いたくなる作品です。

選に漏れた作品にもたくさんの光る部分がありました。ただ構成や表現力、テーマにやや難があったり、設定場所の取材不足などが見えて賞にいたらなかったのです。がんばって再度の応募を期待します。

〈作家　仙北市（旧角館町）出身〉

高レベルの受賞作品と問題点

西木正明

ふるさと秋田文学賞の選考に加担して、早くも6年目になった。これまでの候補作もそれなりのレベルだったが、今回はとびきりの作品がそろった。数ある文学賞のどこに挑戦しても、良い結果を出すのではないか、と思える作品が複数あった。

とりわけ小説の部で受賞した上月文青さんの「BASEBALL CLOUD」は、アマチュア作家の手による作品とは思えぬ、ハイレベルな作品だった。

だがそれは、撰者らがどうにか読了出来たから言えることだ。目が衰えた一般の高齢の読者なら、紙面を一瞥しただけで、読むのを諦めるような原稿が届いた。

小説にしろ随筆にしろ、日頃会ったことのない読者に、読んでもらう事が大前提となる作品は、最初の読者にとって、読みやすいリズムで書かれていなければならない。

この度受賞した上月文青さんの作品は、そういう視点から見た場合、読者に親切な原稿とは言えない。にもかかわらず最終候補に残り、結果として受賞したのは、読みにくいがそれでも読ませてしまう力が、この作品にはあったということである。

この点に関しては、佳作を受賞した片桐健文さんの、「颯爽と雪解け道」にも言える。

問題点は何か。それは通常の本や雑誌、新聞などに掲載される、小説原稿や掲載文とはまるで異なる形の原稿が届き、小説原稿に不可欠の、リズム感を感じ取ることが出来ないからだ。

こういう形になる理由のひとつに、作品の多くが原稿用紙に鉛筆やペンではなく、パソコンやワープロのキーボードで、打ちこまれているからだと思われる。

手書きで書いた文章を読み返してみると、時に書いた自分が驚くような表現に出会うことがある。いわゆる神の手が書かせてくれた文である。

手書きの流れの中だと、ここは改行して読みやすくしたほうがいいとか、この部分は漢字でなく、ひらがなで表現したほうがいいとか、その時点での原稿の見栄えにも気持ちが動く。

キーボードで書く時は、必ずと言っていいくらい、自分の頭の中で文章を構成してからキーボードを打つ。なので手書きで書いている時のように、神の手が手助けしてくれることがなく

なる。

というわけで、この度のふるさと秋田文学賞のような、ハイレベルの受賞作であっても、最初にその原稿を目にする選考委員、いわば最初の読者たちの読書リズムに対応しにくいものであれば、それだけで評価が厳しくなっている可能性がある。

そうした視点で今回の候補作を見た場合、一番読者に対して親切だったのは、随筆・紀行文のジャンルで受賞したえばたえりさんの作品「遊びにおいでよ」だった。

この作品は、長野県出身の作者が、実家に帰省すると必ず会いに行く同級生の、しーちゃんについて書かれたものだ。

この親友はヨガインストラクターとして、いつもいきいきとして、帰省した親友の愚痴などに付き合ってくれる。しーちゃん自身も結婚生活で長く苦悩した経験があり、父親不在型の育児に苦労していた作者を力づけてくれた。帰省する時、作者は秋田名物のきりたんぽをおみやげに持参して、心楽しく故郷を楽しむことが出来た。

そうこうするうちにしーちゃんが、ガンを患っていることが明らかになった。それでもなお、秋田に行くことを楽しみにしていたしーちゃんとの別れの悲しみを淡々と描いた、ロング

エッセイの傑作だと思う。

〈作家　仙北市（旧西木村）出身〉

寄稿

語彙を豊富に

一次選考委員　柴　山　芳　隆

小説やエッセイは、芸術と同じで、真・善・美・聖といったものを究明していくだけでは不十分である。それらを効果的に表現しなければならない。

文章作品の表現力を高めるには、さまざまな修辞法を身につけたり自分なりの比喩表現を工夫したりといった勉強も大切で有意義であるが、同時に、語彙を豊かにすることを心がけ、それを日々積み重ねていく努力も怠ってはならないであろう。読書を通じて、それまで自分が知らなかったことばや表現に触れるのはそれだけで意義があるし心楽しいことである。そもそも、書くエネルギーを供給してくれるのは読書なのである。

海岸を表すのにいつも「海岸」という単語しか使えないようであればそれは語彙不足のそしりを免れ難い。場面や状況に応じて「海べ」「浜べ」「なぎさ」「汀線」「海畔」などと言

い替えられれば、それは海岸に関わる語彙が豊富ということになる。上記のうち「海べ」「浜べ」「なぎさ」の三つは昔から日本にある大和ことば（和語）だが、「海岸」「海浜」「汀線」「海畔」の四語は中国から渡ってきた漢語である。

現在、日本語は七〇万語余りあると言われている。（最新版の「広辞苑」はそのうちの二四万語を収録している）。七〇万のうちほぼ四割が「大和ことば（和語）」で、六割が、元来は中国のことばであった「漢語」である。

縄文や弥生の独特な文化を生み出した日本民族であるが、自分たちの文字はもたなかった。ことばはあってもそれを表記する手段がなかったのである。

奈良時代に入ると事情が一変する。仏教を中心に中国の文物が次々に流入し、それらを表す漢字漢語が大幅に勢力を拡大したのである。器用な日本人は、本来は中国語を表記するための文字である漢字を自分たちのことばを書き表すツールとして取り込み、早速それを具現化していった。漢字の機能のうち音のみを借用して「万葉がな」の発明などをしていったのである。

アルファベットやひらがなは音しか表さない表音文字であるのに比し、漢字は音と同時に意味をもあらわす表意文字である。つまり、漢字は単に記号としての文字であるだけでなく、意

味をも含む中国のことばそのものなのである。

漢語が入ってくる前に大和ことばは一定の段階にまで発展していたであろうが、新しく流入した漢語は優れた文化を背景にしていたし、すでにして体系の整った便利なことばであったのでたちまち日本の上流社会に浸透、平安時代になってひらがなが発明された後も、公的な文章はすべて漢字で書かれるという時代が長く続いた。その間に、漢字漢文は一般社会にも徐々に拡がっていき、大和ことばの発展はストップしてしまった。

奈良時代に起きた現象と似たような事態が明治維新の時期にも再起した。急激な欧化政策によって欧米の文化が一時的に大量に日本に入ってきたが、それらの文物・思潮などを表すことばが当時の日本語にはほとんどなかったので、多くはとりあえず漢語に置き換えられ、それがそのまま定着して現在に至った。これも、日本語の中で漢語の占める割合が増加する要因の一つになったのである。

ふだん我々の使用していることばの六割がもともとは外国語（漢語＝中国語）であるという事実は、物を読んだり書いたりしていくうえではやはり等閑視できないであろう。大和ことばには、日本人が自然のうちに培ってきた優しさ穏やかさをたたえているが、漢語は合理性や簡

潔さという点でとても重宝な言語である。語彙力を増やして両方を上手に使いこなすことが表現力を高める有力な手段の一つにつながると考える所以である。

〈秋田市在住の作家〉

秋田県の読書活動推進施策

～日本一の読書県をめざして～

秋田県は、全国に先駆けて読書条例（秋田県民の読書活動の推進に関する条例（平成２２年４月１日施行））を制定し、また毎年１１月１日を「県民読書の日」と定めています。

Ｈ２８～Ｒ２年度は「第２次秋田県読書活動推進基本計画」に基づき、「あなたの『読みたい！』をサポートします」、「『読書は楽しい！』の気持ちを広げます」という県民運動の視点で、県民の共感を高めながら読書活動を推進しています。

©2015 秋田県んだッチH290213

《読書活動推進体制》

●秋田県読書活動推進基本計画の進行管理

秋田県読書活動推進本部《知事を本部長とし、各部局長で構成》

●施策の一体的推進

秋田県読書活動推進連絡会
《庁内関係１２課所で構成》

総合政策課　次世代・女性活躍支援課
長寿社会課　障害福祉課
教育庁総務課　幼保推進課　義務教育課
高校教育課　特別支援教育課
生涯学習課　県立図書館
生涯学習センター

●市町村との協働による推進

秋田県読書活動推進連絡協議会
《県と２５市町村で構成》

市町村企画担当課
市町村教育委員会読書活動推進担当課

県総合政策課
教育庁総務課　　生涯学習課

≪令和元年度　県の読書活動推進の取組≫

○ふるさとの文学と読書のつどい2019（10/26〈土〉）

１１月１日の「県民読書の日」にちなんだイベントとして、秋田市にぎわい交流館ＡＵで開催し、約２３０名が参加しました。

第１部「第６回ふるさと秋田文学賞」表彰式では、受賞者４名の表彰のあと、選考委員の内館牧子さん、塩野米松さん、西木正明さんの選評をお聞きいただきました。

第２部トークライブ「どすこい、読書！」では、大相撲元関脇豪風の押尾川親方（北秋田市出身）と放送作家の元祖爆笑王さん（能代市出身）が、「書店に行くと、思わぬ本との出合いがあって楽しい。」「読書には頭にも心にも響くものがある。」などと読書の楽しさや読書への思いを語りました。

元祖爆笑王さんと押尾川親方

参加者からは、「受賞者のスピーチが素晴らしく、選評もとても参考になり、私も応募してみたいと思いました。」「親方のトークがうまくて、楽しく聞かせていただきました。読書の機会をもう少し作りたいと思いました。」等の感想が寄せられました。

○読んだッチ・リレー文庫

子どもたちの読書環境を充実させるため、読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、保育所等に贈って子どもたちに読書の楽しさをリレーする取組みです。

平成２３～３０年度までの８年間で９６３名の方々から寄贈があり、８１７か所の施設に届けられ、子どもたちに楽しんでもらっています。

保育所、幼稚園、放課後児童クラブ、公民館、体育館、病院、店舗等、子どもたちが集まる県内の施設ならどこでも設置できます。随時受付していますので、ぜひご利用ください。

読んだッチ・リレー文庫（例）

○読書の魅力発信事業

若者を中心とした県民の読書意欲を喚起するため、特徴のある取組をしている書店やブックカフェの経営者等を取材しTwitterやウェブサイトで発信したり、県内のトップアスリートによる本の紹介動画と県出身の芸人による読書啓発動画を制作し、動画投稿サイトYouTubeで配信しています。

【動画】
○北都銀行バドミントン部
　永原和可那選手
　松本麻佑選手
○ねじ（県出身芸人）

ねじ（せじもさん、ササキユーキさん）
（YouTubeチャンネル「あきたブックネット」）

ブックカフェについての投稿
（Twitter「あきたブックネット」）

○読書活動推進パートナー支援事業

企業や民間団体を読書活動推進パートナーとし、住民が身近な所で読書に親しめる環境づくりに取り組む市町村を支援する事業としてＨ２９年度から３年間の計画で実施しています。今年度は１０市町村で実施し、３年間で２３市町村に図書コーナーが設置されました。

～読書に関する情報を発信しています～

○「あきたブックネット」（「美の国あきたネット」内）
https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/31730

作品募集要項・応募者内訳

第６回ふるさと秋田文学賞　作品募集要項

●募集作品

○テーマ　秋田県を舞台とした、あるいは秋田県内の自然・人物・文化・風土・物産などを題材とした小説、随筆、紀行文

○部門　「小説の部」　…A4判の400字詰め原稿用紙50枚以内
「随筆・紀行文の部」…A4判の400字詰め原稿用紙20枚以内

ご注意
送付部数は
４部(コピー可)
です。

●応募資格

年齢・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

●作品募集期間

平成31年4月1日(月)から令和元年7月31日(水)まで
※郵送（当日消印有効）または持参（平日午前９時～午後５時）してください。

●賞

「小説の部」	ふるさと秋田文学賞　…１編（正賞/賞状　副賞/賞金50万円） ふるさと秋田文学賞（佳作）…１編（正賞/賞状　副賞/賞金5万円）
「随筆・紀行文の部」	ふるさと秋田文学賞　…１編（正賞/賞状　副賞/賞金30万円） ふるさと秋田文学賞（佳作）…１編（正賞/賞状　副賞/賞金3万円）

※入賞者には、後日、受賞作品集を贈呈します。

●選考委員

１次選考委員　柴山　芳隆　氏　（作家　秋田市在住）

最終選考委員　内館　牧子　氏　（脚本家　秋田市出身）
塩野　米松　氏　（作家　仙北市：旧角館町出身）
西木　正明　氏　（作家　仙北市：旧西木村出身）　（五十音順）

●応募規定

○原稿
・原稿は縦書きとし、電子データでの応募は不可とします。（ワープロ原稿は横長A4判の白紙に30字×40行の縦書きで印字し、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記）
・日本語で書かれた自作未発表のものとします。

○表紙
・応募作品には次の事項を明記した表紙をつけてください。
①応募部門、②題名（ふりがな）、③原稿用紙換算枚数、④氏名（ふりがな）、⑤ペンネーム（使用する場合のみ）、⑥郵便番号、⑦住所、⑧電話番号、⑨年齢、⑩性別、⑪職業（学生の場合は学校名）、⑫引用または参考とした資料・文献、⑬募集を知ったきっかけ（過去に応募、リーフレット、公募ガイド、新聞、ウェブサイト名等）

○あらすじ
・200字程度にまとめたあらすじを表紙の次のページに添付してください。

○応募部数
・作品は４部お送りください。（コピー原稿可。必ず通しページ番号をつけ、表紙、あらすじを書いた紙を添付の上、右肩をクリップ等で綴じること）。

○その他
・表紙、ワープロ原稿の様式は、ウェブサイト「美の国あきたネット」でダウンロードすることができます。
・〈表紙〉に記入された個人情報は、本文学賞に関するもの以外には使用しません。
・応募作品は一切返却しませんので、あらかじめご了承ください。
・各部門一人１編に限り、同一部門への二重投稿は失格となります。
・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。（ただし、主催者は著作者本人の意向を尊重し、作品を広められるよう配慮するものとします）。

●選考結果の発表

・令和元年10月中旬、入賞者に直接通知するとともに、ウェブサイトに掲載します。
・表彰式は令和元年10月26日（土）「ふるさとの文学と読書のつどい2019」（秋田市で開催）で行います。

●応募・問合せ先

秋田県企画振興部　総合政策課　県民読書推進班
〒010-8570
秋田県秋田市山王四丁目１番１号
電話　018-860-1216 ＜平日：午前９時～午後５時＞

第６回ふるさと秋田文学賞応募者内訳一覧（R1）

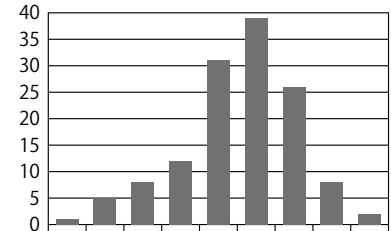
部門別応募数（編）

小説	66
随筆・紀行文	66
計	132

男女別応募者数（人）

男	81
女	51
計	132

年代別応募者数（人）



	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
応募者数	1	5	8	12	31	39	26	8	2

都道府県別応募数（編）

県内		44
県外		87
県外内訳	北海道	3
	青森県	1
	岩手県	5
	宮城県	4
	山形県	1
	福島県	0
	茨城県	6
	栃木県	2
	群馬県	2
	埼玉県	7
	千葉県	9
	東京都	21
	神奈川県	2
	新潟県	0
	富山県	0
	石川県	0
	福井県	1
	山梨県	1
	長野県	0
	岐阜県	3
	静岡県	2
	愛知県	3
	三重県	1
	滋賀県	2
	京都府	0
	大阪府	3
	兵庫県	3
	奈良県	0
	和歌山県	0
	鳥取県	0
	島根県	0
	岡山県	0
	広島県	1
	山口県	0
	徳島県	0
	香川県	1
	愛媛県	2
	高知県	0
	福岡県	0
	佐賀県	0
	長崎県	0
	熊本県	0
	大分県	0
	宮崎県	0
	鹿児島県	1
	沖縄県	0
国外（フランス）		1
計		132

第6回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日　令和二年二月一日

発　行　秋田県

編　集　秋田県企画振興部総合政策課

電話〇一八（八六〇）一二一六

秋田県